
駆けろ、姫に賭けろ！

友絵少尉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

駆ける、姫に賭ける！

【Nコード】

N0037Y

【作者名】

友絵少尉

【あらすじ】

近未来の日本。少女たちのあいだに“魔導少女症候群”と呼ばれる病気が流行していた。発病した少女は、“魔導少女”と呼ばれ、魔法の力を発揮、制御できないこの力により、周囲に破壊をもたらしてしまう。事態收拾のため、国家に軍政が敷かれ、軍政異端審問局が法務省の外局として設置された。魔導少女を治癒するためには、その魔導エネルギーを消費させつづけるしか道は無い。このため少女たちを極限まで追い詰めるためのレースが考案された。“魔導少女迎撃競技杯”（インターセプション・カップ）である。少女たち

を追い詰めるべく、人工の魔導エネルギーが開発され、少年たち
与えられた。人工の魔導少年の誕生である。かくして今夜も、魔導
少年が、魔導少女をレースマシンで追い込み、彼女らのマシンを撃
破する過酷なレースが始まった。魔導少年の中学生マミヤは、日中
は中学に通い、深夜になると審問局の異端審問猟騎兵として少女迎
撃に動員される日々を過ごしていた。彼は初陣、第二戦とレースを
連続圧勝で飾った元エリートだった。その後なぜか敗戦を重ねつづ
ける彼は、ある日運命の美少女と出逢うのだった。“魔導の姫”と
呼ばれる美少女と――。

魔導少女狩り〜深夜の首都高速〜

少年の騎乗した魔導二輪装甲車輛は、
時速三〇〇キロメートル超のスピードで東京、首都高速環状線を疾
駆していた。

装甲のボディカラーはサーキットブルー。

車体は流麗なエアロフォルム、

それでいて武装をもつが故の無骨さを兼ねそなえたシルエットだ。
ヘッドライトのハイビームが前方の闇夜を切り裂いてゆく。

現在、魔導爆燃機関の出力は毎分、

三万一二六五魔導力場展開を記録、エンジンシステム異状なし、
重力波制御システム異状なし、

各種武装、火器管制システムやはり異状なし。

全システム、オールグリーン。

コクピットのコンソール、分厚い超硬化透明プラスチックのウ
インドシールドに守られて、

魔導メーター、スピードメーター、各ディスプレイのモニタ画面が
そう告げてくる。

オールグリーン。だから、狩れ、と命じられているかのようにだ、
マシンに。

今夜こそ、魔導少女を狩れ、と。

ほんとうにマシンが命じてくるかのように、

プレッシャーを与えてくるかのように、少年はそんな錯覚すら憶え
た。

軽く頭をふってみる。

第二次世界大戦時のナチス・ドイツ軍を彷彿とさせる形状のフリ
ツヘルメット。

十五歳のまだ華奢な少年にはその重量が頸に重く感じる。

けれどその両眼には爛々と燃える光が宿っている。

蒼白の光だ。

魔導爆燃機関の内部で爆発、燃焼している魔導エネルギーとおなじ色の光だ。

走行中に本部からビデオ通信のコールが鳴った。

ディスプレイに男の顔が映しだされる。

整えられた優雅な白髪の持ち主だった。

『軍政異端審問局よりマミヤ曹長へ通達、マミヤ聞こえるか私だ』

「はい大佐」

『今夜こそ戦果を上げろ、魔導少女のハウキをへし折ってやれ』

「了解しました（アイ・サー）」

『まったく貴様は返事だけは一人前だな』

大佐は苦々しい捨てる、ターゲットの？魔導少女？の現在位置を送信してきた。

それに彼女の戦績も、その子の騎乗する魔導二輪装甲車輛の主要諸元、
インターセプト魔導少女迎撃に必要な情報のすべてが開示されてくる。

極秘情報——彼女の名前、年齢、住所などの個人情報。それ以外のすべてが。

ターゲットの魔導少女は、今夜が初陣だった。

軽い相手、のハズだ。

思念を集中する。

少年の、マミヤの意志に呼応して、魔導爆燃機関の回転が徐々に上昇してゆく。

出力、三万二〇二九アーデルハイド、三万二二一五……、三万二
三——。

『マミヤ曹長っ、なんたるザマだ？ 一六戦目にもなってまだそれしか出せんのかっ、

今夜敗北すれば貴様どうなるか分かっているんだろうなっ？』

大佐が罵声を浴びせてくる。

いつものことだ、聞き飽きた叱責の言葉を少年は受け流した。

午前三時過ぎの東京の街、マミヤ以外首都高速に車影は、無い。警視庁交通機動隊と軍政異端審問局の合同部隊が交通規制を敷いてくれているからだ。

防弾仕様の前輪がアスファルトの路面を抉り、白煙を後方に残しながらマシンが奔る。

魔導少女のマシン迎撃、そのための専用魔導二輪装甲車輛、ヤークトフロント通称獵犬。

いまスピードは時速三四〇キロメートルほど、重力波の干渉を周囲に与えながら、老朽化してすでに久しい首都高を駆けぬけてゆく。

眼前にひろがるのは、快晴の暗闇の空。

突風が、時速三四〇キロで疾走するマミヤとヤークトフロントに殴りかかる。

彼の全身に空気が喰らいついてくる。痛くはない。痛覚は麻痺しているからだ。

重力波を右側面へ散布する。

同時に重心移動、マシンを寝かせ、右コーナーに突入する。

重力干渉を受け、対向車線のむこうがわ、

首都高の強固な遮音防壁が波打って震動していった。

魔導の発する力を借り、右に吸いよせられる感覚になる。

まるで右半身が、何メートルも離れた遮音防壁と癒着したかのようだ。

さらに急減速、時速一〇〇キロまで落としてかろうじてコーナーを曲がる。

ふたたび加速をかける。

彼のヤークトフロントが江戸橋ジャンクションを通過、コーナーを曲がりきり、直線コースへ。

ヘッドライト、強烈なハイビームが路面と前方とを照らしだす。遙か前方、見えてくる。

魔導少女の駆るマシンのシルエットが見えてくる。

マミヤ少年の駆るヤークトフロントが、ついに魔導少女のマシンを目視内射程に収めた。

火器管制システム、作動。

ヘッドマウントディスプレイの片眼鏡が自動操作で右目を覆ってゆく。

射程距離四〇メートル、ターゲットのマシン、時速一六〇キロで走行している。

ヘッドマウントディスプレイに覆われた右目に、目盛状格子レティクルが投影される。

加速にのみ使ってきた魔導エネルギーを攻撃にふりわけるときがきた。

減速して、二〇ミリ機関砲に装填された呪法弾にエネルギーの充填を開始する。

火器管制システムの充填完了のシグナルが鳴ると同時に、前輪をガードする正面装甲板左脇の二〇ミリ機関砲フロントカウルをフルオート射撃した。

重厚な発射音、同時に空葉莢が排莢され路面にぶち巻かれてゆく。魔導少女も負けてはいない。

おなじく減速して、拡散重力場を後輪後方へ展開、呪導爆雷を四発、路面に投下すると彼女は一気に加速をかけた。

逃げ切りを図るつもりだ。

マミヤは一転、エネルギーをまた加速にふりむけながら、左右へハンドルを切る、ハイビームの光のなか、爆雷が乱舞してきた。

一発目を右にかわし、二発目、三発目、そして四発目の爆雷をかううじてやりすごす。

すぐ後方ほんのコンマ数秒の差で、爆雷が起動した。

首都高速線上の大爆発、立てつづけに四回だ。

ヘルメット越しに爆音とアスファルトの焦げる不快な匂いに襲われた。

魔導少女は必死だ、逃げ切るしかない彼女にとって必死の、これは？競技会？だ。

「ごめんね」

マミヤは自分でも気づかないうちに、つぶやいた。

機関砲を再び連射した。

敵の拡散重力場に妨害され、弾道が曲がってゆく。

それを計算に入れたうちの二発、ターゲット後部装甲に二発命中した。

相手のマシンが黒煙を吹き始める。

加速がやんで、徐々に距離が縮まってくる。

なおも魔導少女の駆るマシンが逃げる、必死に。

ヤークトフロントとは車種が異なる、逃げ切ることに特化した魔導

二輪装甲車輛。

ヴィルトカッツェ

通称、山猫。

六万アーデルハイドは叩きだしているかも知れない。

それぐらい後部の四つの排気口から蒼白く美しい光が残光を残し伸びている。

魔導エネルギーの光、それは魔導爆燃機関のまだ生きている証拠の光だ。

マフラーのついていない排気口、

マシンの叫び、魔女の悲鳴が深夜、首都高に鳴り響く。

時間がもう無い。

少女が京橋ジャンクションで右に曲がろうとして、車線変更してくる。

それを見越して、また呪法弾をフルオート連射、外した、わざと外した。

外した砲弾はターゲットの装甲板の左をかすめ、飛翔、どこまでもつづく首都高の防護フェンスに直撃、爆発をおこした。

呪法弾の残弾はすくない。

あとは強力だがしかし、操作に強い思念集中を要する？呪法誘導ミサイル弾？があるけれど――。

少女が京橋の右コーナーを曲がる直前、

そのミサイル弾が蒼白い魔導力の光を放ちながら、マミヤの後方から猛スピードで飛翔してきた。

彼の右脇を素通りしていった。

ターゲットの少女が曲がったところでシルエットが目視内から消える。

ミサイルが追尾してゆく。

爆発。

コーナーから直線に変わるあたりの路上、大爆発が起きた。

呪法誘導ミサイル弾がターゲットのマシンを、ヴァイルトカツツェ山猫を撃破したのだった。

マミヤが火器管制ディスプレイを解除、右後方モニタを確認する。

別の魔導二輪装甲車輛が、同僚の獵犬ヤークトフントが走行していた。

スピードを上げ、マミヤのマシンにぴたり、並走してくる。

ボディカラーはムーンミストグレー、相手から通信が入ってきた。『減速すれば？ もうすぐコーナー曲がって弾着地帯に突入するよ』

なんとも軽い口調、放課後に学校の課題をひとり先に片づけ、余裕を見せてくる生徒の声音だった。

首都高速の悲鳴

二騎のヤークトフロントは減速して、京橋のコーナーを曲がった。
光景は無残だった。

魔導少女の騎乗していた山猫^{ザイルトカツツエ}、大破して路上に残骸を晒している。
装甲カラーは派手なハーベストゴールド、その装甲板の欠片が首都高のLED照明に照らされ、虚しく光っている。

ふたりの獵犬^{ヤークトフロント}たちが急停車した。

マミヤは騎乗したまま、魔導少女を、路上でへたりこみ、肩を震わせている少女を見ていた。

ヘルメットのバイザー越しに見える少女は、中学生くらいだろうか？ 十五年次生——中学三年生——の自分とおんなじ？

すこし若いかな？ 十三年次生か十四年次、そのあたりに思えた。
右のマシンに騎乗した大柄の少年はつかつかと少女にむかって近づいていった。

彼も、魔導少女も、ほぼ同じ服装に身を包んでいる、マミヤとおなじだ。

それはまるで極薄のウェットスーツのような、全身のシルエットを、ぴたり、露わにしてくる防護服だった。

薄く軽い、それでいて対呪法、対爆、抗弾、対NBC兵器の性能をもつ優れものだった。

魔導防御兵装^{マギアパンツァー}。一般にはパンツァーと略して呼ばれている。

魔導少女のパンツァーは炎に嬲られ、若干の機械油やスス汚れが付着しているだけだった。

背の高い獵騎兵は少女にむかって、

「軍政異端審問局の定める法令に基づき、君の体表面の視診を執行する、君にはすべての個人情報秘匿する権利が与えられている、僕は、君に関する知り得た情報の一切を漏洩しないことを宣誓する……ええっと、時刻〇三二一、異端審問宣誓を終了、っと」

少女は震えながら、睨め上げてきた。
ヘルメットを乱暴に脱ぎすてる。

主に見捨てられ、路上に点々と転がっていった。
可愛らしい、可憐な少女の貌が現れた。両の瞳からは悔し涙を流している。

美しい金色の髪、青い瞳の白人の少女だった。

光っていた、少女の両の瞳も、蒼白に、元から青い瞳は、さらに蒼白に輝いていた。

三人とも、おなじ色、魔導の色だ。

同僚の少年は、ヘルメットのバイザーを跳ねあげてからじっくり、少女の顔を見て、胸のふくらみのシルエツト、それから下腹部、股なめらかなラインを描く太ももまで、順繰りに凝視していった。

嫌な目つきだった。極薄のパンツァー一枚を隔てた、その下の少女の体を透かし見ているかのような目つき。

彼は右の手首に巻いた極薄型の吸着式タブレット^{リスト・タブレット}端末とにらめっこを始めた。

開示された情報をチェックして、

「ラッキーツ」

さもおかしげに口笛を吹いてきた。

「おいっ、マミヤツこの女の悪魔の紋章、左のおしりにあるぞっ」

「そうか」

「おいおい、なんだよっ喜べよっ、女のナマケツが拝めるんだぞっ」
そういつて、

「さあ、マガアパンツァーを全部下ろすんだ、おしりが見える位置までね、あっ僕は鬼じゃあないから、うしろをむきながらで構わないよっ」

少女は何度も体を震わせながら、ようやく立ちあがった。慣れた日本語で、

「……ワタシ、これが初陣で、だからたった一試合で紋章が消えるとは思えないっ」

敗れても決して屈しない、そんな声で激しく訴えてくる。

「たしかにそのとおりだね、紋章はかたんには消えない、君のビョーキはすぐには完治しないんだ、だから見せてくれないか、君のおしりをね」

「でもっ」

「脱ぐんだ、僕は容赦しないよ？」

少女は屈辱に唇を噛みしめ、それから目元をぬぐい、彼をじっと睨んだ。

うしろをくるり、とむいて、右手首の吸着式タブレット端末を操作する。

愛騎とおなじハーベストゴールドの色をしたパンツァー、胸の前が上から、ふっ、と左右に開き始めてゆく。

彼はいてもたってもいられない、そんな様子で密着度を喪失したパンツァーの両肩に手をかける。

一気に腰まで引きずりおろした。

「——っ」

少女の、屈辱の吐息。

その裸身、体全体から魔導力の光が、蒼白色の炎が躍り、周囲を照らしだす。

マミヤは、眼を背けた。

「ええと？ 左のおしり、と……ああ、まだ紋章、残ってるねえ、ちよっと薄れた感じだけど残ってるねえ……君、来週のレースも出場しないか？ 僕に負けてまた見せてくれよ、ナマケツをね」

それからわざとらしく、咳払いをひとつして、

「異端審問による身体視診検査をこれを以て終了します、着衣の乱れを直して構いません」

いけしゃあしゃあと言ったのけた。

少女はすぐさま、パンツァーを両手で引き上げ、さらけ出していた裸身をかくした。

また座りこんで、彼を睨みつけてくる。

彼はヘッドセットマイクにむかい、声高らかに戦勝報告の通信を始めた。

「こちらソルベ、ソルベ中尉であります、ターゲットのハウキをへし折りました、くりかえす、魔女のハウキをへし折ってやったぞーっ」

彼のヘッドホンから、軍政異端審問局オフィスのおおきな歓声が漏れ聞こえてきた。

ソルベという名の少年が自身の愛騎にもどってくる。意気揚々と、大股で歩いてくる。

「下衆野郎」

マミヤがつぶやいた。

「……………ハウキをへし折るのは、勝利した猟騎兵の当然の責務だ、まあ上官として、いまの問題発言に対して寛大なところを見せてあげるよ、曹長くん？」

マミヤは自分より二階級上の同級生の顔に、ありったけの侮蔑をこめた視線を放った。

ソルベ中尉が、この三万アーデルハイドしか回せない無能野郎め、とそうささやいて、陰のこもった笑みをつくってくる。

嫌な笑みのまま愛騎のヤークトフロントにまた騎乗する。

上空から、エアの排気音が大音量で聞こえてきた。

マミヤが、ソルベが、金髪の魔導少女も上を見る。

警視庁交通機動隊のエア・マシンがゆるやかに下降してくるところだった。

強烈なサーチライトとランディングライトがマシンから地上へ降りそそがれてくる。

機体は全長一〇メートルちょっと。

後部の左右に翼がある。両翼は機体の斜め下方へと伸びており、着陸時にはヘリコプターのランディングギアのように、脚の役目を果たすようになっている。

マシンはゆっくりと、機体底面の巨大なふたつの排気口からエア

を吐きだしながら、弾着地帯のすぐそばの路面に着陸してきた。

胴体のハッチが下方へと開く、それが階段のかわりを果たして、キャビンから大人たちがぞろぞろと降りてくる。軍政異端審問局の審問官、警視庁、生活安全部の少年事件課の刑事たち、交通警察の機動隊員らだった。

魔導少女のむかおうとした？今夜のコース？のその先、西銀座方面からは、消防車輛や修復作業車などが何台もつらなり到着してくる。

少女は、異端審問官たちに連行されてエア・マシンにさせられていった。

乗りこむ間際、魔導少女は泣きはらした貌にもかかわらず、マミヤのほうを見てきた。

マミヤを見て、すこし、ほんのすこしだけ、微笑みを見せた。

彼は、ヘルメットを脱いで彼女になんとか応えようとした。

掛ける言葉は、見つからなかった。

彼女はそのまま機体のキャビンへと消えていった。

唯、重苦しい表情で見送るしか術がない。

七月の暑気が押しよせてくる。パンツァーの空調をワンランク上げた。

空を見る、マスメディアの何台ものエア・マシンが空中でホバリングしているのが見える。

機動隊のエア・マシンが離陸、垂直上昇を始め出す。

マミヤは無言で、空に浮かぶマシンどもを見上げていた。

マミヤ〱中学の日常の風景〱

マミヤのかよう中学校は、ごく普通の公立校だ。

東京二三区からすこし離れた、南東京市の市立中学校。

未明の？闘い？に動員されたけれど、きょうは平日、学校は休ませちゃくれない。

なんてったって一五年次生——中学三年——義務教育の真っ盛り
ってヤツだからだ。

眠たい目をこすり、遅刻ぎりぎりで一五年二組のドアを開ける。

二〇人ちよつとのクラスメイトたち、階段状の教室、ドアの左手
が最上段の席、右には教壇と大型ディスプレイがあった。

数人の同級生たちがかけよってくる。

みんなが口々にいってくる、おいマミヤ、深夜の動員オットメご苦労さん
っ、とか、ネットでニュース見たぞっ、？インター杯？残念だった
なっ、とかなんとか、そんな感じにいろいろ騒々しい。

教室最上段を見る、ソルベを中心にして、クラスのいちばん目立
つ男女が集まっている。

例によって、ソルベの未明の？インター杯？その武勇伝の吹聴会
が盛大に開かれていた。

背の高いソルベはひときわ目立っている。

横目で見ながら、中段ぐらいの席、窓際の自分の席に座った。

すると女子の集団からひとりがマミヤのほうへ駆けよってきた。

となりの自分の席に音を立てて座りこむ。マミヤはだらしなくデ
スクに突っ伏した。

元気印のポーター、けっこうカワイい、愛嬌のある顔立ち。

小学校からこっち、ずっとなぜかおなじクラスで顔をつきあわせ
てきた。

「なんだよオナホ？」

「ばーかっ、ナホさまと呼びなっ、それ、ホントマジウザい、百万

「回くらい聞いたからっ」

名前を茶化された反撃に、ナホが打って出てくる。いつもの挨拶のようなものだ。

「ねえ、あのさ、深夜の？インター杯？……残念だったね」

口調にはいたわりがあった。仕事をリストラされる運命の彼氏に對する、彼女のような。

「それ、やめてくれ、高校のインターハイじゃあるまいし、嫌いなんだよその略し方」

「だってさ、誰も？魔導少女迎撃競技杯？なんて長ったらしいの、呼ぶわけないでしょ」
インターセブション・カヅラ

ナホは大胆に耳元に顔をよせてきて、

「グレード？（G・？）のインター杯ですら、勝てないってマミヤどうしちゃったの？　？つったら小物の魔導少女ばっかしか出てこないじゃない？」

「だからソルベ中尉殿に譲ってやったのさ、？小物の獲物？をね」
「っ……あんた分かっていってんの？　一四連敗だよっ？カド番？なんだよっ」

「だからどうしたんだ？」

「つぎのレースで負けたら獵騎兵クビになっちゃうじゃないっ、あんな小物相手につ、昔の勢いはどこへいったのよ？」

唐突に、未明、あの魔導少女の涙が脳裡をよぎっていった。

小物の獲物？　ちがう、ひとりの少女だ、獲物なんかじゃない、人間の女の子なんだ。

あの子は屈辱に耐えていた。パンツァーを剥がされ、きれいな背中を、腰を、その下も見せ始めて――。

そこで眼を背けた、直視できずに。これが己の仕事であるにもかかわらず。

でも？　ほんとうは、見たかったんじゃないのか？

あのソルベと自分、おんなじ人間のオスじゃないのか？

いくら打ち消しても疑問は消えてくれない、なあ？　ホントは――

」。

「——なに、どうしたのママヤ」

ナホが肩に手を掛けてくる。ママヤはデスクに顔をうずめたまま、

「……自己嫌悪」

つぶやいた。

と、そこへナホが、

「あー、やだっ、きなすったぜ、ソルベ中尉様々がっ」

「マジ？」

ふて寝してごまかすことに決めた。

「よう、万年連敗曹長殿っ寝覚めはよかったか？　もう慣れっこだろ、負けんのにも」

数人の取りまき連中が笑いころげた。

ナホはソルベに挑む視線で、

「ママヤ曹長はアンタに獲物を譲ってやったんだってさっ、小物だったからよっ」

不吉な沈黙がおりた。

取りまきのひとりが怒り出して、ナホと言い争いを始めた。ソルベが片手をあげて、

「やめろ」

ソルベの一言、場がおさまった。

「こっちはやってやるわよっ、インターセプター異端審問猟騎兵の中尉様だからってイバンじゃねーよっ、あたしらとおんなじ一五年次のクセにっ」

「なあナホ、お前の彼氏の——」

「バカッ、こいつはっ、ヤダ、彼氏なんかじゃないわよっ」

「まだ、ママヤ、とはひと言もいってないけどね」

「——っ」

「まあいい、じゃあお前のペットのママヤくん、インター杯何勝何敗か知っているのかい」

「ど、どうだっていいじゃないっ」

「よくはないさ、魔導少女の魔力は撲滅されなければいけないんだ、社会の秩序の為にな、そのために僕たち審問獵騎兵が体を張ってる、僕はいずれG?に打って出るよ、あのエースのシゲミツ中佐と肩を並べるまでになってみせる、絶対にね」

「シゲミツさんに？ アンタがあ？ アタマ湧いたんじゃないのっ？」

「すくなくとも、その負け犬よりは可能性があるよ」

「マミヤだってがんばってるわよっ」

「二勝一四敗のどこが？ ？カド番?のどこががんばってるってんだよっ」

マミヤは横目でちらり、周囲を見る。

上背のあるソルベにむかって、ナホは決然と相對していた。

ナホは怒っている、本気で青筋を立てて怒りまくっていた。

「ごめん、ソルベ、俺、もうすぐクビだから」

鬱陶しい、自分にはナホにかばってもらう価値なんかない、そう思うからテキトウに謝った。

「ちよっ、マミヤーッなんかいいかえしなさいよっ、すこしぐらいっ」

「傑作だなっ、女の腐った奴はそうやって他人に頭下げつづける人生ってわけだっ」

ソルベはひとしきり、取りまきたちと笑いあってから、ナホに、

「なあ？ こんな負け犬の相手はやめてさ、僕のグループに入れよ、僕ってば、また年俸が上がっちゃってさあ、こんなに？ ってくらないんだぜ？ なんせ僕はG?、G?あわせて一八勝無敗だからさ――」

ひっぱたいた、ナホが一八勝無敗の異端審問獵騎兵中尉様の横っ面を盛大にひっぱたいた。

クラスの連中が集まり出した。ナホやめなよー、とナホの友達連中がいつてくる、おいケンカやめろー、と中立派のグループの男女たちも大声をあげ出した。

そこへ初老のクラス担任がようやく入室してきた。
皆、自分の席に着き始める。

ソルベはナホをじつとり、凝視しながら、

「……このままじゃ済まさないぞ、いいか、絶対にだからな」

「アンタなんかそのうち負けてみなさい、自称エリートクンほど負けると脆いモンよっ」

「……」

ソルベはナホを見て、マミヤを睨み下ろし、ついで教壇の担任に一瞥をくれた。

無言で立ち去っていった。

取りまきたちが中指を下品に突っ立ててくる。しっしっ、とナホが掌をふって追いかえす仕草をする。彼女がどっかと席にまた座りこんだ。

「ナホ」

「……」

「なんでおまえが泣く？」

「ばーか、このあたしが泣くわけじゃないっ」

マミヤはまたデスクに突っ伏して、

「……ごめんな」

ナホがこっちをむく、その気配を感じる。

「だからっ、なんで……そんなすぐ謝んのよっ」

涙声でささやいた。

はい、みなさんおはようございます、初老の担任が朝の挨拶をし
てくる。

クラス全員が起立する。

「はい座ってよろしい、ええと……きょうの一限目は、あー、倫理
学ですね」

担任は連絡事項を伝えて、ホームルームをとっと切り上げ教室
をあとにした。

全員が座った。あー、かったりーよねー、倫理の授業っ、皆、そ

う口々に騒ぎ出す。

マミヤは横目で彼女を見た。

ナホはうつむき、しきりにポニーテールに手をやって、髪をいじっていた。

表情は、見えなかった。

平穏な授業の破られた日

一限目、倫理学の授業――。

かったるい内容をさらに酷いものにしてるのが講師のやる気の無さだった。

「えーまあこのようにね、

現代の生命科学をもっとしても、なぜ魔導少女が一定の割合で誕生しつづけるのか？

なぜ第二次性徴期を過ぎた少女の体表面に、悪魔の紋章と呼ばれている痣が生じて魔導少女として覚醒するのか？

依然真相は不明だけど、おおくの仮説の立てられるなかで最有力なのは、恋愛感情が覚醒や魔導力と密接に関わっているとゆう――」

倫理学の時間、解説をつづける二〇代のスマートなおバサン、いやいや、お姉さんが教壇に立っている。

一〇代のころはさぞかし美少女として遊んだんだろう、そんな派手なファッションに身を包んでいた。

彼女の正体は、法務省の内局である人権護民局の護民官だった。

講師としてときどき市内の中学をまわっているのだ。

ちなみについたあだ名はゴミンゴちゃんという。

マミヤは憂鬱な気持ちで窓の外を眺めていた。初夏の陽差しは眩しかった。

手首の震動に気づいた。右手に巻いた手首専用リストのタッチパネル情報端末、リスト・タブレット、通称リスタブのバイブレータ機能が働いて、震動したのだった。

メール受信を告げている。

メールは転送されまくっていた。発信者はこのクラスの中立派グループの女子である。

《日本魔導少女自立支援協会（JMA）の最終オッズ情報だよー

ーっ》

バカらしい、そう思い、メールを削除しようとした。
となり、ナホがおんなじメールに見入っている。

なんとなく、マミヤもつづきを読んでみることにした。

《今日深夜三時のG？、一対二戦インター杯最終オッズ、
ソルベ中尉単勝一・二三倍、

ワンオンツー

それにくらべてマミヤ曹長のオッズは二七・六四倍ーーーっ、
これじゃ賭けにならないよねーーーっ、

やっぱりうちのクラスの出世頭はソルベ君に決まりかもねっ、危
うしカド番曹長っ》

ナホがじっと、見入っている。

すると彼女は、自分のリスタブでメールを打ち始めた。

来た、受信、またバイブレータが作動した。ナホからのメールだ。
開いてみる。

《負けないで》

ただ、この一行。たった、これだけ。

マミヤは自分のリスタブにうかぶデジタルの文字を追った、画面
にじっと見入ってタッチパネルにうかぶ文字に指で触れてみた。

『——と、いうわけでね、

魔導少女をそのかし、その破壊力を悪用した魔導テロが世界中
で頻発するに至り、我が国におきましても、

やむなく時の政府は、国会を解散、一時閉鎖の超法規的措施を執
りつつ、

軍政があくまで臨時措置として四〇年前から施行されるにいたっ
たわけでございまして、

やむなくも少女たちの健全な育成、人権擁護、情緒不安定になり

がちな彼女たち魔導少女の魔導エネルギー発散のため、

ひいては完全にエネルギーを消失させるためにね、

インターセプション・カット

魔導少女迎撃競技杯がですね、

ほんとうにやむなく開催されるようになったわけでありまして、

あ、

……テキスト読むの疲れたわ——」

教壇の上のゴミンゴちゃんは、まったくやる気のない声音でテキストを棒読みしていた。

それにつけても、この美女、やる気モードOFFっちゃってる感じがものすごい。

マミヤは横目でナホを盗み見た。

彼女は、ぷいっ、と右に顔をむけて表情をかくす。

ポニーテールを可愛く揺らしながら。

「そのための組織として法務省の所管の下、人権をですね、

あくまで人権擁護の立場を固持しつつ、

独立行政法人であるところの、日本魔導少女自立支援協会（JMA）

が発足したわけでございましてですね、

インター杯の収益金アガリは、法務省の貴重な利権、協会は大事な天下り先になってるのよね

……あ、余計なこと言ったわ』

誰も聞いちゃいなかった。

マミヤもそうだった。考えた挙げ句にメールの返事を打ち返した。

《ごめん、ありがとう》

送信する。

となりの少女は文面に見入っていた。突然——。

「ばーか」

唇の触れるくらい、マミヤに近づき、耳元でささやいてきた。

彼女の吐息、右の半身が熱くなる、熱を帯びる。

彼女の唇が、吐息が、貌が離れていった。

彼女はまた自然な姿勢をとりもどして、何事もなかったかのように教壇のディスプレイに目をやっている。

——ばーか、耳について、離れない言葉。

少女が、こつん、と左足でかわいくキックをしてくる。

マミヤは、そうっ、と肘で少女の腰の脇を突つついた。

少女がこっちをむく、微笑んでいた、もう泣いてはおらず、微笑んでくれていた。

マミヤは戸惑った、どうしていいのかわからなかった。

初夏の陽気、教室のエアコンがなぜか、ちっとも効いてはいないように思えてくる。

「ええとね、

彼女たち魔導少女に対抗、迎撃すべく、軍政異端審問局はね、人工の魔導少年とも呼ぶべき少年たちの育成を開始いたしました、このクラスにもお二方、在籍されていらっしやいますね？
うら若き異端審問猟騎兵さんですねっ、猟騎兵さくくんっ」

ゴミンゴが突然、黄色い声を上げてくる。

彼女がソルベをちよつと見て、それからマミヤを見てくる。

手をふつてにこりと微笑んでくる。

最上段、ソルベの席のあたりから、口笛、拍手、喝采がわきおこってきた。

例によって取りまき連中だ。

「授業にもどりますよ、

はい、彼ら少年たちが人工的に魔導エネルギーを発揮するため、
？魔導石？が発明されました、

発明したのは、魔導工学で最先端の研究を誇るドイツ連邦でござ
いましてですね——」

ナホがマミヤの耳に口を近づけ、

「なーによ、ゴミンゴのヤツ、マミヤに気があるんじゃないのっ」
彼女はふくれっ面だ。

まさか、とマミヤは軽く首をふってつぶやき返した。

マミヤのデスクの上、震動がおきた。

学習用の大型ペンタブレット端末が小刻みにデスクの上を動き出す。

バイブレータの機能なんかじゃない。それは教室全体の震動だった。

そしておおきな校舎の揺れ、爆発音が聞こえてきた。

護民官のお姉さんのやる気のない、けれど饒舌な語り口がやんだ。

——さらに、こんどはいっそうおおきな震動。

床が小刻みに揺れる。轟音が聞こえてくる。

下の階のほうからだ。

「ナニこれ地震っ？」

女子の誰かが叫んだ。

それが合図と化して全員が席を立つ。

「はい、落ちついてくださいね、落ちついて行動を——」

ゴミンゴが呼びかける。

誰も聞いちゃいない。

クラスは騒然となり始めた。

第三級アーデルハイド暴走事件

クラスが騒然となる。

そこへ校内放送を告げるチャイムが鳴り響いてきた。

『ええ、緊急放送です、これは訓練ではありません、みなさん慌てないでください』

校長のアナウンス、本人の声は狼狽しきっていた。

全館に放送の流れるのが聞こえてくる。

『ええとですね、一三年四組、女子生徒がですね魔導少女として覚醒の様、

とり乱した状態ですね、重力場を放出中、

？第三級魔導力場展開暴走？の様です。

一階校舎の被害甚大、速やかに普段の避難訓練同様、避難の開始をですね——』

ゴミンゴが真っ先に教室から飛びだしていく。

急ぎ、現場につけるつもりなのか、このお姉さん、

やれ人権擁護だのなんだのって、どうやら口先だけではなかったらしい。

マミヤが立つ。

ゴミンゴのあとを追うように、教室内の階段を跳ぶようにして降りてゆく。

「マミヤッ」

ナホの悲鳴に、ふりかえって、

「おまえは訓練どおり非常階段から地上へ逃げろっ」

ナホに叫び返す、ついでソルベを見上げて、

「なにしてるっ現場にいくぞ中尉っ、護民官殿に後れをとるなっ」

一喝されたソルベは、茫然自失の体からようやく自分を取りもどしたようだ、

大柄な体を素早く動かす、階段を下りてマミヤの元にやってくる。

「魔導石は四錠もってる、中尉はっ？」

「僕は五錠だ、第三級暴走なら楽勝だぞ、被害者救出優先でいこう、マミヤ曹長っ」

「わかってるっ」

ふたりの少年が廊下に出る。

先にいったゴミンゴの姿は、無い。

ふたりがうしろをふりむく。

髪を振り乱し、廊下を走り逃げゆくゴミンゴの後ろ姿があった。

「ゴミンゴのヤツツ、ひとり非常口のほうへ逃げやがったっ」

「構うなくぞ中尉っ」

ふたりが制服のブレザーから金属製のピルケースをとりだす。

蓋を開けると、蒼白色に光り輝く魔導石の光が少年たちの顔を照らしだす。

長さは一五ミリくらい、長方形のカプセルのように形状が整えられている。

少年たちが一錠をとり、噛み、砕き、舌下錠の要領で唾液に溶かす、速やかに全身に成分を行き渡らせる。

「——来たっ、クソツ、漲ってきたっ」

ソルベが荒い息を吐く。

プライドの塊のような少年だけれど、仮面を脱ぎすてたいま、獰猛な猟犬の本性を見せていた。

マミヤも頬を紅潮させる。

血圧、脈拍、心拍数の急激な上昇と興奮、快楽を押さえこむのに躍起になる。

走るうち、ふたりの両眼が光り出す、蒼白に輝きだしてきた、あのときの、未明のインター杯のときのように。

やがて体の表面、皮膚全体からも、制服の着衣の下から光を放ち始めた。

少女との出逢い

ふたりの少年は、避難する生徒らの波にぶつからないよう、教職員専用回廊を通って最短コースで現場に駆けつけた。

校舎一階の一三年四組の教室、隕石メテオの落下してきたような惨状を呈している。

破片は外壁を突き破り、外廊下は足の踏み場もない有様だ。

現場は無人だ。

倒れている者の姿も無い。

何度か目撃してきた、これが？第三級魔導力場展開暴走？の破壊力だった。

ソルベの右手首のリスト・タブレット端末、通称リストタブに軍政異端審問局から緊急指令通信が入った。

相手は大佐だった。

ソルベが大佐と連絡をとりあう。

その姿を見て、やはり痛感させられる、自分は下士官なのだ。

この現場の指揮官は、自分ではない、中尉であるソルベのほうだった。

アイ・サー

「了解しました」

ソルベがこっちを見て、

「学校から審問局に報告がいつてる、死傷者はゼロ、ターゲットは現在一三年五組の教室内に移動した模様、彼女のデータがきた、君に転送する」

「了解中尉」

軍政異端審問局からソルベのリスタブへ、覚醒した魔導少女のデータが送られてきた。

それがミヤのリスタブに転送されてくる。

ミヤは画面を注視した。

《ターゲットの宗教感情…国家定期健診の心理スキャン情報／一〇

○%無宗教との判定結果アリ・オカルティズムへの関心傾向…アニメ等からの情報に傾倒中／受診から五三日経過》

日本では無宗教のパターンが比較的多い。

特定の信仰があれば、それに感応する専用の呪符を用いてターゲットを拘束できる。

彼女の場合、アニメ、コミックなどサブカルチャーからの雑多な情報の影響を多大に受けていた。

この子を拘束するためには、それに応じた、いかにもそれらしい呪文、術式が有効だ。

それがその子にとっては、最大の心理的效果、打撃となってくれるからだ。

ふたりはブレザーの懷、専用のホルスターから――拳銃用のものではない――呪符を数枚とりだした。

審問局から？それらしい術式・呪文？がダウンロードされてくる。最初に呪符にインストールされてきたのは、晴明桔梗印、いわゆる五芒星だ。

それに？臨兵闘者皆陳烈在前？の文字。これは修験者の呪法？九字？の真言である。

五組、この廊下をさらに奥へといったすぐ先にある。

ふたりは魔導パワーの跳躍力を使い、身軽に廊下の残骸の上を跳びこえていった。

五組のドアにたどりつく、ふたりが目でうなずきあい、ドアを開ける。

教室の中、女子がいた、ふたりいた。

ほかに生徒も教師も、避難して誰もいない、ふたりの女子だけだった。

教壇の手前、階段状の教室の最前列、全身から蒼白色の不安定な発光をくりかえし、泣いている少女がいる。

そしてもうひとり、その魔導少女を抱きしめている女子のうしろ姿が見えた。

ソルベが臆した様子で、つばを飲みこんだ。

「中尉、拘束呪符を」

マミヤは携帯用ヒートナイフをとりだした。

ナイフを人さし指の先に照射、血を数滴、呪符に垂らす。

呪符にインストールされた晴明桔梗印と九字が蒼白色に光り出す。

「中尉、早く呪符をっ」

「あっ——」

ソルベも我に返った様子でマミヤとおなじ行動を始めた。

ふたりの若き異端審問猟騎兵は、間合いを詰めていった。

覚醒してしまった女子生徒は、怯えた様子でふたりの少年に貌をむけてきた。

小麦色に日に焼けた、可憐な少女だった。

「——っ」

少女がなにかを言いかけようとする。

マミヤが、覚醒した少女の肩に一枚、拘束系呪符を左手で押しつける。

九字を唱える。

「臨、兵、闘、者、皆、陳、烈、在、前っ」

右手を動かす。

人さし指と中指を伸ばして？刀印？を組む。早九字と呼ばれる呪法を執行した。

びくんっ、と少女の日焼けした体に震えが走る。

ソルベも遅れて呪符を貼る。緊張した面持ちで早九字を執行する。

呪符の九字が、ふわり、札から離れ、空中に躍り出る。

蒼く輝く縄のような形状となって、女子の体に巻き付き始めた。

「……あ、マミ……っ……」

覚醒した子は、ぽつり、と一言だけ声を発した。それからゆっくりと気を喪っていった。

拘束、完了。

ソルベが、ふうっ、と脱力しながらも、すぐに大佐に報告を入れ

る。

マミヤが、抱きしめていたほうの女子を見て、
「軍政異端審問局の者です、異端審問法に基づき、第三級アーデル
ハイド暴走の容疑者を緊急拘束しました、あなたにお怪我はありませんか？」

その少女はすこしばかり首を横にふった。

「御無事でなによりでした、失礼ですが事情聴取にご協力を——」
言葉は、固まった。

女子ががふりかえったのだ、覚醒した魔導少女を抱きしめたまま。
黒い、さらさらのロングヘア、黒と茶色の宝石を凝縮したような、
両の瞳、泣いていた、その瞳から涙が溢れ、こぼれ落ちていた。

少女は、ツン、と上をむいた小生意気そうな整った鼻梁、その下
の艶のあるピンク色の唇から一筋血を流している。

黒髪、輝く両の瞳、こぼれた涙、白い肌に流れる赤い鮮血。

それが、魔導の蒼白色を間近に浴びて、光と影、濃い陰影を醸し
出していた。

マミヤは、任務を忘れ、少女に見惚れていた。なにもできず、立
ちつくしていた。

「この子ならもうだいじょうぶよ」

少女の、凜、とした涼しげな力強い声音。

「……あ、はい、貴女のお怪我は……」

なんとか、それだけ口にできた。

「私なら平気、この子にちよつとぶたれただけ」
くすりと寂しげに微笑んだ。

「あの、それは、なら保健室にきていただきます、応急処置を施し、
その……さらなる治療の必要なときは、医療費は異端審問局に請求
してください、全額を軍政府がお支払いします」

少女はそっと、頭を下げた、礼の印に頭を下げた。
うしろからソルベが、

「曹長っ、大佐の命令だ、僕がターゲットを審問局へ護送する、悪

いな、僕の手柄という形になってしまいが、君はその少女から事情聴取をして、報告を——」

ソルベの言葉が途切れた。

こちらをふりかえった少女の貌を見たのだ。

ぼけっ、としてマミヤ同様、その場に固まってしまった。見惚れてしまっている。

少女が、拘束された魔導少女の体を静かに床へと寝かしてやる。

自分のブレザーを掛けてやった。

マミヤが、

「では、中尉、護送を頼みます」

ソルベはうわの空だった、地球と月のあいだを一往復するくらいの時間、微動だにせずにいて、それからようやく我に返ってきたようだった、月面の宇宙ステーションから帰還して、生まれて初めて生身の美少女と出逢った、そんな顔をしている。

「あ、いや曹長、僕が……君にかわって事情聴取を——」

「大佐の命令で、手柄を得るんじゃないのか、中尉？」

ソルベが顔面を引きつらせて、最大級の悔しさを表現してきた。

少女の名は、エリカ

保健室で、その少女は養護教諭から怪我の手当を受けた。

教諭は、事情聴取のことをわかつていたので、処置後席を外してくれた。

静かな保健室。

ふたりっきりになった。

少女は、椅子に座り、窓の外の景色を見ていた。

なにかの決意、意志をしっかりと秘めたような瞳、居ずまい、そんな雰囲気は少女には備わっているように思える。

マミヤは立ったまま、気圧されていた——相手は一三年次生だぞ？——自身、いいきかせてから右手首のリスタブの録音モードを起動する。

「これより自分が、異端審問猟騎兵マミヤ曹長が事情聴取を開始します、自分のリスト・タブレットに音声記録されますがよろしいですか」

「構いません」

「まず、お名前を——」

「エリカ」

視線は、窓の外をむいたまんまだった。

「……なぜ、貴女は現場で魔導少女を抱きしめて——」

「私の転校してきて初めて出来た友達だったから、だからいっしょうけんめい、暴れるあの子を抱いていたの、異端審問法に触れますか？」

「い、いや、そんなことはありません」

「では、これで帰っていいですか？」

マミヤは、いったん録音を中止した。

つばを飲みこもうとして、気づいた、口の中はからからに乾いていた。

「あの、なにか俺はっ……自分はきみの気に障ることをしましたか」
少女は、初めてマミヤに視線を合わせてきた。

「気づかないの、異端審問官さん？」

「いえ、猟騎兵ですが……自分に落ち度があったなら——」

「きょう、私の大切な、できたばかりの友達が魔導少女になった、
あなた方はその子を縛り上げてから、その子のこと、まるでその場
にいなくなったかのように私をじっと見てきた、あなたも、それか
らさっきの中尉さんも」

マミヤは両眼を閉じた。返す言葉、どうしようもない、なにも見
つからない。

「女の子を口説こうとするんなら、時と場所を選んだほうがいいわ、
それとも異端審問官さんにとって、魔導少女になった子は女の子の
人数のうちに入らなくなるの？」

「申し訳なかった、謝罪します」

「要らないわよ、謝罪なんて」

少女は、エリカは席を立った。

「噂どおり審問官って最っ低ね」

軍政異端審問局オフィスの喧騒 ※重要な改稿有り

エリカ……エリカ・ヴァンデル・メーア。
帰国子女。

先週、ドイツ連邦共和国から日本に帰ってきたばかりだった。

現住所は南東京市、実家は飲食業、兼旅館業。

屋号は？ユリスモールカフェ？……都知事への届け出書類を見た限り、規模などから簡素な宿泊施設の類だろうか、そう思われた。

年齢、まだ、十二歳……大人びた子だった。

振りまわされてしまった。悔しい。

そうだ、これは悔しさ、なんだ。

マミヤは、デスク上のタブレット端末のタッチパネルを叩きつづけた。

なにかに憑かれたかのように。

けれどこれ以上の詳細な個人情報にはわからない。

魔導少女の正体、本名をはじめとする個人を特定できるデータ。

それを知っているのは、軍政異端審問局のごく限られた幹部のみとなっている。

異端審問猟騎兵といえども、すべての情報を思うがままにかき集められるわけでは無いのだ。

ふっ、とため息をついて、今朝の覚醒したばかりの魔導少女、エリカに抱きとめられていたあの少女の容態をたしかめるべく、外線を発信した。

相手は少女の收容先の警察病院だった。

端末ディスプレイにまだ若い女性看護師が映った。

『あら、マミヤ曹長、また今朝の子の件でしょうか？』

「はい、容態は安定しているでしょうか」

『だいじょうぶですよ、バイタルはすべて正常です。』

きょう、もう八回も確認してくるなんて……さては学校で、一目

惚れでもした相手でしたか？』

女性看護師が笑顔になる。

そのうしろ、ナースステーションのほかの女性看護師たちも笑顔を見せる。

マミヤの表情をうかがおうとしてか、画面をのぞき見てくる。

「いえっ、決してそんなことは……仮にも審問猟騎兵です、魔導少女を相手に、その……」

自分でも赤面していくのがわかる、一目惚れ、この言葉に反応してしまったのだ。

『まっ、ごめんなさいね、私ったら……その、冗談のつもりでした』
女性看護師は本格的に誤解した様子だった。

マミヤは顔を赤くしたまま、看護師たちは驚き、好奇心、困惑を様々に見せながら、お互いに謝罪し合う、なんだか訳のわからないビデオ通話になってしまった。

外線を切った。

東京都内、霞ヶ関の法務省の外局、軍政異端審問局庁舎内、五階。
時刻は二二ふたふたいちじ一五時。

もう、午後一〇時過ぎだというのに、庁舎内には残業組ライン職の官僚たちの周囲にスタッフ職が集まっている。

五階フロアでは指示と罵声、口論の応酬が飛びかっていた。

睡眠障害覚醒薬の入ったブラックコーヒーをひと口飲んだ。

ぬるくなったブラック、飲めたもんじゃない。

マグカップを自分の専用デスクにおきなおし、デスクチェアの背もたれに全身をあずける。

何を、何をいったいどうしてこんなにエリカのことを焦って調べているんだ？

あの覚醒した少女のこと、何度も容態を確認すれば、許してもらえる、エリカに合わせる顔ができる、そうとも思っていたんだろうか。

もうひと口、コーヒーを我慢して飲んだところで内線が鳴った。

タブレット端末、着信音だ。

相手は六階にいるソルベ中尉だった。

あまりいまの気分では、というか、まったくといっていいほど相手をしたくなかったけれど、

「なんでしよう、ソルベ中尉」

内線を開く。

ソルベのふてぶてしい笑みがモニタに映った。

『もう定刻を過ぎてるし、敬語はいらないよママヤ?』

「……用件は? ソルベ」

『エリカ・ヴァンデル・メーア……調べていたな? あの子の個人情報?』

眼をつぶって、

「察しが良いな、いつもながら……俺の情報開示請求履歴、見たんだろ?」

『なあ、お互い考えてることはいっしょじゃないか』

「なんのことかな」

『おとぼけは無しにしよう、君には愛しいナホがいるだろ? あ

ふざけた暴力女がねっ』

「ナホを悪くいうな」

『僕は正式に学校事務局に、エリカとの異性間交遊申請をするつもりだ』

「……」

『ハハッ、凶星かつ、凶星だろうっ』

ソルベが含んだ笑みをこぼしてきた。

「いいことを教えてやる中尉殿」

『なんだい?』

ママヤはありのまま、きょう保健室でのやりとりをソルベに話してやった。

ソルベは最初、自信満々の笑みをうかべていた。

そいつが話を聞き終わるころには、月へのシャトルバスに搭乗し

たとき、自分の宇宙服を家におきわすれてきたことにやっと気づいた一〇年次生のような顔になっていた。

完全に余裕の消し飛んだ声で、

『不味い、不味いだろう完全に嫌われたぞっ……君はどう思う？
どうするつもりだいっ？』

「あした学校が終わったらすぐに家に訪問して謝罪を——」

『遅いっ、君はいつも遅いっ、だからインター杯であんな成績をとるんだっ』

「じゃあどうする？」

『いまから実家にいってみるさ、飲食業の届け出見たらう？』

「……ああ」

？ユリスモールカフェ？……カフェの閉店時間は、〇四〇〇（まるよんまるまる）時と申告されてあった。

すくなくともカフェは深夜未明まで営業をしている。

エリカが店にいるかどうか、まだ寝ていないかどうか、それはなんの保証もなかったけれど。

？睡眠圧縮剤？がひろく普及して、市民の睡眠時間が平均二〜三時間ぐらいが常識とはなっていた。

昔で例えれば、夜の七時過ぎに下級生の実家のカフェに遊びにくく感覚に近い。

ママヤとソルベは各々、残務を処理してから怒声の飛びかうオフィスをあとした。

軍政異端審問局オフィスの喧騒 ※重要な改稿有り（後書き）

お詫び

魔導少女の個人データをもっているのは、初稿では人権護民局としていました。これを軍政異端審問局のトップクラスのみ知り得る情報に訂正します。

友絵少尉 2011年11月7日

？魔導の姫？～欧州リーグの覇者～

更衣室で猟騎兵の内勤用常装軍服から私服に着替えをすませる。
軍政異端審問局、庁舎屋上。

エアポートにふたりが顔を見せあったのは、ちょうど日付のかわる頃合いだった。

ふたりは、帰宅する職員たちの行列にならんだ。

民間のタクシー会社のエアマシンが一〇台以上も屋上に集結している。

職員たちのために駐機しているのだった。

飛び立つマシンの二本の脚部、強烈なランディングライトが輝き乱舞していった。

屋上は、真昼のように明るかった。

マシーナ航空機誘導員がつぎのフライトに立つエアマシンを誘導してくる。
マミヤたちが乗りこむ。六人乗りの小型のエアマシンだ。

ふたりを乗せて離陸していった。

マミヤは、眼下にひろがる東京の街並みを見下ろす。

街の灯りのけばけばしい、渋谷、新宿、池袋、赤坂、六本木……。

その周辺、ゲーテッドコミュニティと呼ばれる、半ば要塞化した
防犯外壁に囲まれた高級住宅街、

億の値のつく超高層マンション群。

それと対照的に、灯りのろくすっぽ見あたらないスラム街があちらこちらに散見された。

灯りの街と、昏い街、そのまだら模様。

まだらをつなぐ線、都心の高速道路や主要国道は、打ち棄てられた電気自動車が、暴徒化した住民やギャングの手によって放火され、
無数の燃える点となって、煙を夜空に上げていた。

空に目を転じれば、富裕層と中流層の人々を乗せたエアマシンが
闇夜のあちこちにランディングライトを点灯させて、夜間のフライ

トを我が物顔で満喫している。

「なあマミヤ、この景色を見るたび、僕は優越感に浸るんだ」

左に座るソルベが、ぼつり、いつもとちがった、どうにも疲れた口調で語りかけてくる。

「……」

「ごらんの有様、いまのご時世、民間にろくな仕事なんて見つかりやしないよ、去年の、一四年次生死事件、憶えてるか」

「……金持ちの母親が、十四歳の息子に質の悪い魔導石を飲ませて、拒絶反応で死なせた、あの案件だろ」

「ああそうさ、世の中こんな案件ばかりだ、何千万も払って闇市場で粗悪な魔導石買い漁って、子供に飲ませたところで、？魔導石適性？を保持する少年は一〇代人口のたった〇・一％だったのにな……親ってのは……自分の子供にバカな期待を持ちすぎるんだよ」

マミヤは心底うんざりして、

「なにがいたい？」

「ハタチを過ぎても魔導石適性を保持できる確率、〇・〇〇一％未満……だから僕は残り最後の五年間、有意義に過ごす、そう決めたんだ、

ハタチまでに出世して、財産を蓄え……異端審問獵騎兵を分限免職になったら、審問官試験にパスして昇進したい」

「エリートは、いうことがちがうな」

ソルベが初めて、窓から視線を引っぺがしてこちらを見てきた。

「なぜだいマミヤ？　なぜG？のデビュー戦と第二戦、あれだけ華々しく連勝した君が、どうして一四連敗なんて無様な……カド番なんぞに陥ってしまったんだい？」

「さあね、無能だったんだろ」

ソルベは、納得できない、そう小声でつぶやいてくる。

「僕は……僕は勝利しつづけるんだ、絶対にだ、僕になら……できるはずなんだ」

「立派な宣言だな、でもならどうしてそんなに声が疲れているんだ

」？

ソルベは眼をつぶり、問いには答えようとはしなかった。

前に座る中年のパイロットがこちらを見てくる、気さくな声で、
「お若いのに、達観してるっていうかねえ、猟騎兵さんは語る話題もそこらの子とはちがうもんですね」

「そうだよおじさん、僕は選ばれた存在だからね」

ソルベがあしらうように生返事をする。

マミヤが横を向いて、またクソ面白くもない夜の退廃しきった首都をぼんやり見つめ出す。

「まあねえ、わかりますよ、今夜はねえ、我が国の猟騎兵さんたちの落ちこむのもね、無理はないでしょう」

ソルベが初めて、興味を示したそぶりで、

「何かあったんですか、事件が、魔導テロでも？」

「ご存じなかったんで？」

マミヤも、窓からパイロットへ目を転じる。

「欧州リーグの覇者、G？のあの魔導少女がいま来日してるでしょうに、？魔導の姫？さまがねえ」

「初耳ですっ」

ソルベが身を乗りだした。

体を固定したハーネスを突っ張らせながら。

「私もね、今夜のニュースで知りましてね、ああ残業しなすってたんでしたっけお二方は？　だからか、今夜緊急のG？インター杯、開催されたんですよ、五号池袋線でねえ」

ふたりの少年は絶句した。

局のオフィスのあの喧騒、怒りの声……これが理由だったのか。

「相手は、あの姫の相手は誰です？」

マミヤが訊ねる。

「シゲミツ中佐ですよ、我が国の猟騎兵のあのエースライダーの……
ワンオンワン

……一対一の一騎打ちですよ、熱く燃えたんですがねえ、

勝負前は、の話ですけどねえ……最終オッズは姫が一・二九倍、

シゲミツ中佐は二・八五倍でしたが、それがねえ……」
過去形。

少年たちは、大嫌いな互いの顔を見つめあってしまった。ソルベが呆然として、

「負けたんですか、あのシゲミツさんが？」

パイロットは何度もうなずいて、

「速攻で負けちゃいましてねえ、タイムは一分ちよい、だったかなあ？」 姫のあの必殺技が炸裂しちゃって、ねえ、あの例の――」

ゲシユライ・トラウム
「希望の悲鳴」

マミヤがつぶやいた。声に熱が、こもっていた、かつては持っていた熱が。

“ユリスモールカフェ”　～魔女のサバトのラプソディ～

マシンのなかで、それ以上姫のことについて誰も語ろうとはしなかった。

沈黙がおりる。

マミヤとソルベはそつぱをむいて、窓の外を見ていた。

パイロットも雰囲気を感じたのか、饒舌な口を閉じてしまった。

南東京市のエアポートに到着して、マミヤたちはすぐにエリカの家に向かった。

？ユリスモールカフェ？に。

住所の情報を頼りに街を歩いていく。

この街一帯は、都心から逃げだしてきた、中流よりすこし上、若干富裕層のためのマンションが林立している。

どこか、ヨーロッパの街並みを意識したかのような、石畳の清潔な歩道。

目抜き通りには二〇メートル以上の高さのマロニエの大本が街路樹として等間隔に植林され、並木道になっていた。

初夏の熱がまだ街を支配している。

ここには、暴徒の影も、壊され放棄された自動車の残骸もなかった。

「おかしい、このあたりのハズなんだがな」

ソルベが焦り声でいった。時刻は午前一時過ぎ。

ともかく、エリカはふたりを嫌っているのだ。

交際を申し込むどころの話ではない、謝罪から始まる最悪のスタートといえた。

「やはりこの建物じゃないのか」

マミヤがとあるレンガ造りの建物のまえで立ち止まった。

赤茶色のレンガ造りの外壁、西洋木蔭の一種、イングリッシュアイビーが蔓を伸ばして壁面を覆っている。

三階建ての瀟洒なアパートメント、そんな雰囲気だった。カフェの看板どころか、表札も見あたらない。

ふたりはうなずきあい、ドアの脇の呼び鈴を鳴らした。

『どちらさまでしょうか』

インターフォンの少女の声、エリカではなかった。

聞き覚えがある、たしかに、マミヤは思った。

「ソルベと申します、失礼ですがこちらは、エリカさんのご実家のユリスモールカフェではございませんか？」

自分はエリカさんの通う中学の一五年次生です、

エリカさんにお会いしたくうかがった次第ですが」

沈黙。

マミヤがドアの上、小さな透明の球体を見つける。

ぼん、と手の甲でソルベを軽く叩く。

顎をしゃくってやる。ソルベも上を見て、うなずいてきた。

球体は監視カメラだった。

『……………どうぞ』

ドアの鍵が屋内からの操作で開けられた。ふたりが緊張した面持ちで建物に入ると、風防のためのガラスドアが正面に設けられてあった。

エントランスはちいさな風除室となっていた。

内側のドアは押すと開いてくれた。

カフェのホールが目の前にひろがる。

二十人くらいがパーティを開けるくらい、

それくらいの広さ、右手に長く奥へと伸びるバーカウンター。

左手には四人掛けのテーブルが三台。ほそながい造りのホールだった。

ふたりの少年の眼は、左手の壁に釘付けになっていた。

歴代の優秀な魔導二輪装甲車輛、その写真が所狭しと飾られてあったからだった。

異端審問猟騎兵の駆る^{ヤークトフント}猟犬も、魔導少女が逃げ切るための^{ヴァルトカッツェ}山猫も、

両方ともだ。

すごいな、ソルベがめずらしく素直に感嘆を口にする。

ただのカフェじゃないな、マミヤは思った。

カウンターの奥、キッチンから金髪の少女がエプロン姿で顔を見せる。

「君は――」

少年たちは息を呑んだ。

きのうの未明、G?のインター杯で迎撃した、あの魔導少女だったのだ。

少女はソルベを無視して、マミヤに無邪気な笑顔を見せてきた。

「マミヤ曹長、ワタシがこいつにホウキをへし折られたとき、目を伏せてくださいましたね？」

「ご厚意感謝しております」

カウンターのスイングドアからホールに出て、こくん、とちいさな頭を下げてくる。

「……いや、その」

マミヤは言葉に窮してしまう。

それにくらべてソルベは忌々しげに盛大な舌打ちを鳴らした。

「顔バレしましたので自己紹介します、キャロルと申します、フランス系日本人です、

トーキョー都内の中学に通う一四年次生です」

少女が、キャロルが金髪のミディアムヘアをふわり、なびかせながら、はつらつとお辞儀をしてくる。

マミヤにむかってだけ。

自分たちの一個下の少女、キャロル。

エアマシンで連行されるとき、自分に微笑みかけてくれたのは、そういうことだったのか、マミヤは理解した。

そうすると同時に口を開いて、

「この魔導二輪の写真、それから君がいること、ここはひよつとして避難所じゃないのか」

「おっしゃるとおり、このカフェと裏にあるホテルの正体はワタシたち魔導少女の避難所^{サバト}です」

魔導少女の避難所、通称サバト。

世間から迫害と差別を受けやすい彼女たち魔導少女が安心して生活、

定住するための秘密の施設、住処、それがサバトだった。

サバトに関する情報はすべて人権護民局が所掌している。

魔導少女の個人データは、サバトに避難した時点で、

審問局から人権護民局へとそのすべてが開示される規則となっている。

東京だけでもかなりの数があると噂には聞いていた。

天敵であるはずの猟騎兵たちに、偶然とはいえど捜し当てられたのは皮肉としかいいようがなかった。

「さて帰るとしようか中尉殿」

「なっ、まだエリカにも会ってないのにつ」

「猟騎兵がサバトに接触するのは、

インターセプション・カップでの八百長の嫌疑をかけられるだけだ、

それにシゲミツさんの負けた夜なんだ、

サバトで魔導少女とお話をする気分じゃないだろう」

「ちょっと待てマミヤ、シ、シゲミツさんのことは……ともかくとしてだな、

異端審問法では別にサバトへの接触が禁止されているわけじゃないぞっ、

僕らには捜査権だってあるし」

「ゆっくりしてってください、マミヤさんだけ」

「キャロルといったね、君いちいち突っかかってくるなあっ」

ソルベの言葉に、

「当たり前だ、このドスケベ猟犬め、アンタ、ワタシのおしりをオカズに、

寝るまえ変なことしたんでしょうっ？」

可愛い貌に似合わず、物凄い毒舌だ。

「こっ、こここの娘っ」

ソルベが痛くプライドを傷つけられた様子だった。

「ふたりとも落ちついてくれ」

もういっぺんいつてみる、とソルベがいうと、

キャロルもドスケベ犬、ド変態ワンコッ、オトコのプライドもない政府のペット犬っ、

とまあ容赦ない口喧嘩が始まってしまった。

マミヤがもう一度、仲裁に入ろうとしたとき、

「騒々しいわね」

三人が声のするほうをふりむく。

カフェの奥、裏手のドアが開かれていた。

エリカが、立っていた。

白いネグリジェの上、ナイトガウンを羽織っている。

つややかな黒髪は湯上がりで潤い湿っていた。

それをバスタオルで拭きながらホールを突っ切ってやってくる。

マミヤは顔を赤らめて、そっぽをむいてしまう。ソルベは破顔して近づいていった。

「邪魔、中尉さん」

エリカは右手でソルベを払いのける仕草をしてくる。

「ん、あ、あの——っ」

ソルベは、少女のネグリジェ姿を、白い頸を、開いた胸元をガン見しながら、後ずさる。

エリカはマミヤの正面に立ちはだかった。

「あらためて自己紹介するわ、エリカ・ヴァンデル・メーアよ、この避難所のオーナーの娘、放課後はキッチンでバイトしてるの」

「どうも」

ぶつきらぼうに返すマミヤに、エリカは、

「貴方、どういうつもり？ あの子の容態八回も警察病院に問いあわせたそうじゃない？」

マミヤは彼女を直視できずに——特に胸元、未だ幼いながらも胸のふくらみが呼吸でゆっくり、息づいているせいで——さらに赤面してしまい、

「……無事かどうか気になって、それだけだ」

「それだけ？ ふうーん……私にその気がないとわかった途端、こんどはあの子をくどく気？」

「そんなつもりは無い」

「そうよね、天下の審問官様だもんね、獲物の魔導少女なんか相手にするわけ無いわよね」

「異端審問獵騎兵だ」

エリカは、マミヤの訂正を無視して、自分の入ってきた裏手のドアをふりむいた。

「——だ、そうよ、チハヤツ、どうする？」

かるやかに呼びかける。全員の注目がドアに集まった。

ひよい、と小柄な少女がドアに隠れながらも、半身をのぞかせる。少女の髪の毛、左の長く優雅に伸びたサイドテールが、ふわり、揺れた。

「君は、今朝の覚醒した女子じゃないか」

ソルベが驚きを口にする。キャロルは不安そうに、

「ねえ、まだ寝てないでだいじょうぶなのっ？」

エリカは、くすつ、と微笑んで、

「愛しのマミヤ曹長がきた途端、体のだるさはどっかへ消し飛んじやったそうよ」

キャロルが、ふうふうん、と納得げにニヤリ、とエリカに笑顔を返してくる。

「どういふことだ、彼女、退院できたのか」

マミヤが三人の女子の顔を順繰りに見ながらいった。

「はい、ついさっきこの避難所^{サバト}に引越してきたばかりですっ……あ、あのっ、私マミヤ先輩のことっ、私、ずっと、ず、ずっとあの、あっあっあっ、あのっ」

チハヤはちっちゃな体を震わせ、舌っ足らずな口調で渾身の告白をしてくる。

キャロルがぷうつ、と噴きだして、

「好きだったんだ？ チハヤ？ 覚醒するまえから？」

チハヤが隠れた半身、顔も、足も手も使って精一杯動かし、何度もうなずいた。

「僕は気に入らないな、なんだ？ なんなんだこの展開は、これはいったい——」

「空気野郎は黙ってなさいよ」

またしてもエリカのきつい一言。

「そっだよ、このスケベ犬めっ」

キャロルがピンクのベロを出してくる。

「き、君たち、僕を誰だどっ？ G？G？あわせて一八勝無敗の——」

キャロルは大笑いして、

「デメエなんかあの？魔導の姫？様にくらべたらド三流のチョーザコ野郎じゃーんっ」

「しっ、失敬なっ、世界のG？の頂点に立つ魔導の姫とだね、

まだG？の僕を比較するのは、卑怯だぞっ。

だがしかしだね、い、いずれは僕もだな、いずれはG？には——」

「黙れば？ 妄想は貴方の夢日記にでも書いてなさいよ」

三度、エリカのきつい声。

「僕にくらべたら、このマミヤ曹長はG？のお荷物なんだぞっ、一四連敗のカド番野郎だっ」

エリカはカウンター席のウインザーチェアを引きよせ、馬乗りに座りこんだ。

両の白い、ひきしまった太ももが、ネグリジェからすこしだけはみ出してくる。

ソルベの目が釘付けになる。

マミヤは天井、あらぬほうへ急いで目線を逃がした。

エリカが背もたれに、けだるげにあげを乗せて、

「なら、勝負する？　ここでオトコの度胸、見せあうのもいいんじゃないの？」

「いいともっ受けて立つっ」

ソルベが鼻息を荒くする。エリカの太ももと膝小僧を見て、さらに小鼻をふくらませる。

「中尉だけせいぜい好きにやっていってくれ、俺は帰る」

マミヤが踵を返しエントランスへとむかう。

エリカがキャロルに、ちらり、目配せする。キャロルが笑んで、

「マミヤ曹長っ、お話があるんでーすっ」

駆けよって、彼の腕を引っつかんだ。

キャロルの胸——けっこうある——思いっきり少年の肘に押しあてられて、くにゃん、と形をかえてくる。

少年は赤面して、体を引き離そうとする。

キャロルが、まあまあ、こっちへ、そういつて、ふたりならんでエントランスの風除用の内扉を開ける。

キャロルが扉を開めると風除室にふたりっきりになった。マミヤは困惑してしまい、

「なにをするんだ？」

「マミヤ曹長、魔導少女を代表してお礼をいいます、みんな

一四戦連続でわざと負けてくれていますよね、つぎ負けたらカド番だってゆうのに」

「……」

「隠しても無駄っ、闘えばわかりますっ、ワタシはみんなから先に聞いていたけど、

きのう闘って確信しました、魔導機関を傷つけずに後部装甲板だシートカウル

けに被弾させるなんてっ、スゴいです」

「……買いかぶりだ」

「ホウキをへし折るの、嫌だからでしょ？ だから負けてくれてるんですよね？」

みんながそう噂をしあってます、

きょうぐらいあのバカ犬中尉と闘って、本気見せてくださいっ」

「俺にはなんのメリットもない」

「勝負してくんないなら報道機関にリークしちゃおっかなー、

異端審問獵騎兵マミヤ曹長は一四戦連続で故意に敗退してるって、八百長疑惑？ そんなんに発展したらキャロルは嫌だなー」

キャロルが、ヤダなー、ヤダなー、といいつつ、

密着してきて——またしても胸が、ふにゃんという感じになって——しなだれかかってくる。

「……」

マミヤは額の汗を拭きながら、わかった、わかったから離れて、とすこし声を荒げた。

キャロルが内扉を開けてうれしげに、

「マミヤ曹長が勝負を受けて立つってーっ」

マミヤの腕を引きながら、ホールに踊りこんできた。

引くに引けない勝負　夏の夜更けのラブソディ、第二幕

エリカがうつすら、笑みをつくり――カフェの古風なシェードランプの灯火に、見事に映える笑みで――すらり、身を翻し、バスタオルをチハヤにむかって放り投げる。

チハヤがサイドテールを揺らし、慌てて受けとる。

それを見てから、エリカはキッチンへと入っていった。

出てくると、両手にもっている肉切りナイフを二本、高々と掲げて見せた。

形状記憶型のサンダルを脱ぎすて、カウンターに乗りあげ仁王立ちになる。

膝の隠れるくらいのネグリジエの裾、太もものシルエットが、くつきり、天井のシェードランプの灯りで透けて見えた。

ママヤがやはり恥ずかしさのあまり、視線を逸らす。

ソルベは絡みつく視線を向けた。

エリカは両手に一本ずつ、切っ先を下にしてナイフをもった。

全長三〇センチほど、おおきな肉切りナイフだった。

「ふたりともチェアに座ってくれない？　両手は下に降ろしたままね」

ふたりはいわれるがまま、ウインザーチェアに座りこんだ。

カウンターの横で互いを睨みあう恰好に座らされる。

頭をちよつと下げて、カウンターをのぞきこめば、

エリカの履いてるショーツがもろに見えてしまいそうなの、見えなそうなの、そんな角度。

キャロルがママヤに近づいて、彼の左横にしゃがんだ。

チハヤが、そろそろっ、と歩いてきて、ソルベの右横で正座した。

「いい、みんな？　これからナイフを貴方方の正面の床に落とすから、

見事に柄をつかみ取ったオトコが勝者よ、

手は片手のみ使うこと、私の合図とともに手を出すこと、
それまでは下に降ろしておくこと、いいわね？

キャロルとチハヤが貴方方の監視役をするからフライングしたヤツは失格よ」

ソルベが、エリカのふくらはぎ、太もものシルエット、かわいらしくふくらんだ両の胸、

それから彼女のツン、とすました表情、最後に二本のぎらつく肉切りナイフを見上げた。

「僕が勝ったら賞品はなんだい？」

「私のいま履いてるショーツを見せてあげるわ、ご不満？」

「僕はっ、い、異存ないぞっ」

マミヤに顔を転じて、

「君はどうなんだっ」

「……構わないが」

キャロルが横から、くすくすっ、としながら、

「ねえマミヤ、顔つき、ガラッと変わったー」

「からかわないでくれ」

「僕は負けないぞ、なあエリカ、もしもふたりとも成功するか、失敗したときはっ？」

「そのときは引き分けね、残念賞なら……そうね、あしたにでもなんか考えておくわ」

「よっ、よし、いつでもこいっ」

ソルベがナイフをじっと睨み上げる。

マミヤはそんなソルベを冷静に眺めていた。

「じゃあ、いくわよ」

ふたりの少年、同時にうなずく。

キャロル、チハヤの両の瞳が輝きを帯び始める、あの、蒼白の魔

導エネルギーの光を帯びる。

少年たちの手の動きを見逃さないために。

魔導力の宿る瞳で——そう、それはどんな地上の野生動物をも凌駕する視力を誇っている——瞳で熱い視線を注いでくる。

エリカが、じっと、見下ろしてくる。

その瞬間を図る、一匹の野生のメスの獣のように。

カフエは、静まりかえり

。

——エリカの両の指が開く。

ナイフが落ちる。

少年たちの手が空を切る。

トンッ——。

小気味のよい音がして、ナイフは……ナイフが——。

床のフローリングに突き刺さっていた。

二本だ、二本とも、刺さっていた。

ソルベは伸ばした右腕を、怯えた様子で震わせていた。

マミヤは、そんなソルベの様子をやっぱり、無表情に見つめているまんまだった。

ソルベが憤慨して立ちあがり、

「どうやら引き分けだね、ぼ、僕はこれで失礼するっ」

「バイバイ政府の御用犬——っ」

キャロルの毒舌を背中に浴びながら、ソルベはエントランスを抜け、外へ駆けだしていった。

キャロルが、にひひー、と笑って、

「はい、勝者はマミヤ曹長でしたあー」

「詳細を教えてよ、ふたりとも」

エリカがカウンターの上からホールの床に飛び降りてくる。
ふたりの魔導少女が、エリカに耳打ちした。

マミヤはウインザーチェアから立ちあがり、

「ちがうだろう、勝負は引き分けだ、俺も帰る」

三人を見渡してから、エントランスへと歩いていくと、

「待ちなよ審問官さん、ふたりはナイフを片づけてきて」

はいっ、とキャロルとチハヤがいつて、ナイフを引っこ抜くとキツチンへと姿を消した。

「また、わざと負けたようね、ソルベが失敗するのを見届けてから？」

「いや、意味がわからないが」

「冗談いわないで、ふたりの魔導少女の動体視力、貴方方とかわらないこと、忘れたの？」

「……」

「貴方、一瞬、柄をつかんだそうじゃない？ 精確にね、ソルベの

失敗を見届けてから、瞬時にまた手放した、ホント、器用なこと……

…なさるのね」

「あのふたり、乱視なんじゃないのか」

「勝者は貴方よ」

「よしてくれ」

「見たく、ないの？」

マミヤが顔を真っ赤にして、

「あ、あたりまえだろう、正式に異性交遊許可証の発付されていない女子を相手にっ——」

「じゃあ、かわりに残念賞をあげるわ」

エリカはいうやいなや、両の手をネグリジェの裾に入れ、裾をたくし上げ、純白のショーツを一気に引きずりおろしてくる。

マミヤが咄嗟に両眼を背ける。

「やめてくれっ、なっなにをっ」

エリカは太もも二本をかるやかに動かし、両の太もも、ふくらはぎ、足首から、

しなやかに白い二本の脚を踊らせ、ショーツを脱いでしまった。

丸めると、マミヤに放った。

少年が両手で受けとめる、思わず、受けとめてしまう。

少年は両眼を、ぎゅっ、とつぶり、両手の中にあるものを見ないようにして、

強く、強く握りしめていた。ショーツにはやさしいぬくもりが残っていた。

マミヤにはそれが灼熱の痛みに感じられた。まるで掌に太陽を握りしめているかのように。

「いっておくけど、男の子にこんなコトするの生まれて初めてなんだからね」

「……」

「お好きに使っていいから、おやすみ曹長さん、今夜寝れたら、の話だけれど」

「——っ」

少年は悔しさと、羞恥と、目の前のうつくしい少女へのこらえようのない想いを胸にして、唯、唇を噛みしめ、見返すほかなかった。少女は、少年のすべての想いを受けとめるかのようにして、微笑んでくれていた。

「それと、学校では馴れ馴れしくしないでよね、約束よ？、私って基本、審問官は嫌いだから」

「……異端審問獵騎兵だ」

少女は、くすつ、と目をほそめ笑顔をこぼしてから、寂しげに、「いっしょよ」

つぶやいた。

マミヤ曹長はエリカをひと睨みして、それからエントランスを抜け、

外へ、ユリスモールカフェの外へとしゃにむに走り逃げ出してい

った。

エリカは、マミヤの後ろ姿を見送った。

内扉の鍵を掛ける。途端に――。

くたっ、とその場にへたりこんでしまった。

両手で、ネグリジェの裾をきつく引つつかんでいる。

まるでそうすれば、投げ渡したショーツがまた舞いもどってくる
とてもゆうかのように。

キッチンから、キャロルとチハヤが出てくる。

キャロルは忍び笑いを漏らしていた。

チハヤはとんでもない？恋の超強敵？ライバルのエリカをまえに
して、すでに涙目だった。

「OKーっ、上出来だったよーっ、雑誌のマニュアルどおりっ」

そういつて、手にもっているEペーパー――紙状の極薄携帯端末
――をひろげて見せる。

紙面には、ダウンロードされたコンテンツのデジタル文字が躍っ
ていた。

《この夏本番！ 彼氏ゲット大作戦！》

派手なロゴでそう謳い文句がならんでいる。

エリカはそんなキャロルにすがりつくような視線を送った。顔は
真っ赤っかである。

「っ、恥ずかしいっ、やっぱりこんなマネするんじゃないっ
そういつて、両の瞳に涙を、本気の涙をにじませる。

キャロルが呆れ、ため息をついて、

「いまさら何いつてんのっ」

「だって、だいじょうぶかな？ 私、彼にどう思われたかな？」

エリカの声は不安をとおりすぎて恐怖に震えている。

まるで彼氏の写真を手にフルヌードでニヤニヤしているところを
彼氏その人に見られちゃった、

そんな醜態を晒した少女のように。

さっきまでの威厳はどこへやら、だった。

マミヤ、カグラ姉さんに連行される

翌日、マミヤはどうとう一睡もできず、寝不足で憔悴しきって登校してくる羽目になった。

ナホやクラスの親しい連中から魔導の訓練でもしてたのか、そう聞かれたりした。

マミヤはデスクに突っ伏したまんま、

「なにも聞かないでくれ」

そういつて、またやつれた眼で遠くを見つめるのだった。

初夏の、窓の外の景色を。

まるで長いギャンブラー人生、カジノでついにロイヤルストレートフラッシュを出してしまったディーラーのような、燃え尽きたような、幸運を使い果たしたような、そんな表情だった。

「なあにー？　ひとり黄昏れちゃったりしてえーっ」

ナホは事情がさっぱりわからず、困惑しているようだった。

そんなナホの質問攻めをかわしつつ、午前の授業は過ぎていった。昼休みの時間、ランチタイムになった。

学校食堂のフロア内、一五年次生の独占する南テラス方面は、遮光ガラスで暑熱をさえぎられ快適そのもの。

清々しい夏の陽差しを独占できる上級生の定位置である。

マミヤは、オートマティックでトレイに料理を盛りつけてくれるマシンの行列にならんだ。

自分のランチが配給されると、すぐさま北側、一三年次生の集まる陽のあたらないエリアへと突きすすんでいった。

四人掛けのテーブルがいくつも横にならんで、生徒たちが和気あいあい、うれしげにランチを楽しんでいる。

マミヤの姿を見つけると、途端、声をひそめてしまう。

それから一転、あちらこちらから押し殺した声がわきおこり始める。

——異端審問獵騎兵のマミヤ曹長だっ、スゲえなあ、ぼくもなり
たいなあ獵騎兵っ、でもあの人カド番だよ、とかそんな、あこがれ、
好奇心混じりのひそひそ声が聞こえてくる。

マミヤは、いちばん男子のたむろしているグループを見つけた。
突進する勢いでむかった。

グループのいかにもスポーツやってますって感じのスマートな一
三年次生たち。

彼らがマミヤを見ると、

マミヤ曹長に敬礼っ、と軍隊ごっこであこがれの念を表してきた。
「すまないが、彼女とふたりつきりにしてくれ」
ざわざわ、とさらに一騒動がおきる。

マミヤ曹長が早くも俺たちのマドンナ、エリカさんに目をつけた
ぞっ、

そんな男子たちの落胆、悲鳴、羨望……ささやきの数々。
一三年次の坊主どもは肩を落として散り散りになっていく。
遠巻きになって、こっちの様子をちらちら、うかがってくるばか
りだ。

マミヤは人払いをすませると、北側の窓際テーブル席に陣取った。
正面にいる女子は、一三年次生。
先週帰国してきたばかりの転校生にして超美少女……。

「きのう……アレは、その、非常に困ってしまった」

エリカはゆったりとくつろいで、席に座っている。

窓外の景色を眺めていた。

学校のキャンパスに植えられた並木が、緑も鮮やかに風に揺られ
ていた。

七月の光の降りそそぐ平穏な昼。

ゆっくりと、気怠い仕草でこちらに貌をむけてきた。

「天下の審問官様でも狼狽することがあるのね」

「獵騎兵だ……からかわないで欲しい」

エリカは、くすつ、と笑みを見せて、

「お気に召すと思ったんだけどなあ」

マミヤは周囲をうかがいつつ、

「アレは君に返す、自分には異端審問獵騎兵として、規律ある人生をだな——」

「わざと——」

エリカが正面切って顔を間近によせてきて、声をひそめると、

「わざと一四連敗してきた貴方がいまさら？　いまさら？」

どのツラ下げて獵騎兵の心得を説くというのかしら」

マミヤは迫力に気圧されてしまう。

この避難所サバトのキッチンで働くイチ美少女をまえにして。

「そんなに困るコトかしら？」

エリカは、ランチのアメリカンクラブハウスサンドイッチをひと口かじり、また物憂げに窓の景色に瞳を転じてしまう。

マミヤは美少女の横顔を、途方に暮れて眺めるしかなかった。

「……当然だっ」

マミヤが頭を抱えこんだところへ、

「あ~~~~~ら、も~~~~うっ、ここにいたのマミヤくん~~~~
~~~~っ」

脳天気な、二〇代ぐらいの女性の声が近づいてきた。

マミヤが顔を上げる。

げんなりした顔をうかべた。

ゴミンゴ姉さんだった。

本名はカグラ。遠くから見るとなかなか美人だけど、間近で見ても妙齡の美人だった。

きのうのチハヤの覚醒事件のとき、トンスラぶっこいたあの護民官である。

「さあマミヤくん、お姉さんといっしょに良いところへいきましょ

っ」

「その、カグラ護民官殿」

マミヤが頭痛を頂点にしながらいった。

「あゝらしいのよいつものように？ゴミンゴッ？って呼んでくれてもねー、ともかく」

マミヤの耳元に口をよせ、

「ユリスモールカフェは秘密の避難所<sup>サバト</sup>なの、

人権護民局の縄張りだしねー、異端審問獵騎兵<sup>ウチ</sup>の君にこられちゃマズいし、

それにあのショーツ——」

マミヤが立ちあがる。

「カグラ護民官殿、自分は、自分はその、あの、この件に関して——」

「わかってる、わかってるっ、さあ、無許可の不純異性交遊の容疑で身柄を拘束しまーすっ」

カグラ護民官に腕を引っぱられ、連行される羽目になってしまった。

「なんだかわからないけれど、いつてらっしゃい」

エリカの妙に冷めた——ほんとうにお芝居ががっているぐらいに

——素っ気ないお見送りを背に受けながら、マミヤは学食フロアを美女といっしょに歩いていった。

サバトは人権護民局の直轄化にある。外部との連絡の一部始終は報告される決まりだ。

どうやら、エリカの口から、護民局のカグラへとすべて筒抜けの様子だった。

少女から少年へと、宙を舞い、渡されたあの純白の、危険物のことも。

思春期の少年に、第一級アーデルハイド暴走すら起こしかねない、魔法のアイテム。

少年の自室、ベッドの中限定ではあったけれども。

フロア中央の大階段のところで、ナホとソルベたちが取りまき連中とともにやってきた。

「あらソルベ中尉、ごきげんようっ」

「こんにちはカグラ護民官殿っ、なにゆえマミヤ曹長を拘束なさったのでっ？」

「いろいろワケありなのよんっ、あ、君は問題ないから安心していてよろしいっ」

ソルベはそれを聞いて、

「あ、安心いたしましたっ」

バカ正直に胸をなで下ろすソルベに、ナホが激怒した。

「ちよっとおおおおっ、アンタってば、自分さえよけりゃあそんでいいのおおおっー？」

「ん？ あたりまえじゃないか暴力女？」

「うっさいわねっ……信じらんないっ、なんでマミヤだけ——」  
そこで血相を変えて、

「まさか、マジで不純異性交遊？ 学校に無許可で？」

ナホはショックを受けた様子で、ただ、ゴミンゴ姉さんに連行される愛しの幼馴染みを見送るしかほかになかった。



フォッカーM?F/Aモデル110(第1異端審問猟騎兵連隊・大隊格納庫にて

マミヤは格納庫の電源スイッチを投入した。

高い天井、LED照明灯がつぎつぎと点灯してゆく。

ひろい格納庫だ。

時刻、二三一〇(ふたさんいちまる)時。

長い廊下、左右には獣たちが、魔導二輪装甲車輛だ、  
ヤクトフロント

猟犬どもがずらりと駐機している。

左の列、格納庫のドアから数えて三騎目。

マミヤの愛騎が、密やかに咆吼をあげるのを待っていた。

装甲のカラーリングはサーキットブルー。

第一異端審問猟騎兵連隊隷下、第一大隊、第一中隊、第一小隊、  
第三班。

マミヤの所属部隊だ。一、の数字のならぶのは、彼がエリートの  
証、

そう、それはかつてのエリートの証。

ここは第一大隊専用格納庫である。

サーキットブルーは自分の小隊カラーだ。

小隊隷下の三個の班、各班に一名の猟騎兵パイロット。

こいつ専属の整備兵一名。

以上二名で一班を構成する。

こいつ——制式名称、フォッカーM?F/Aモデル一一〇。

ドイツと日本の共同開発車輛。

F/Aとは、戦闘及びミサイル攻撃型を、モデル一一〇とは一〇  
〇〇を掛けあわせて、一一万を意味する。

魔導爆燃機関を毎分、一万アーデルハイドまで安全回転できる  
機体性能ってゆうわけだ。  
レッドゾーン

それ以上の回転域は危険領域、

そう呼ばれている。

全長三一九〇ミリメートル。

乾燥重量四三〇キログラム。

機体の横、後方装甲板左横にエンブレムの塗装。  
シートカウル

黒地に赤い髑髏が魔女のホウキを噛み千切っているデザイン。

第一異端審問猟騎兵連隊のエンブレムである。

鋼鉄の獣のまえ、鼻っ面の先でマミヤはあぐらをかいて相対していた。

マシンとおなじカラー、サーキットブルーのマギアパンツァーを着用している。

「なあ、あのさ、フォッカー……」

マミヤは愛騎にひとり、語りかける。

少年のその貌は、とてもおだやかなものだった。

「ゴミンゴ姉さんのヤツがさ、俺に無理難題ふっかけてきたんだよ」  
獣は沈黙したまま、マミヤのまえに唯、その巨軀を固定スタンドにあずけ、静まりかえっている。

マミヤが立ちあがり、騎乗した。

手にしていた、あの金属製のピルケースから？魔導石？を一錠出して噛み砕いた。

瞳が、全身があのだ蒼白のオーラに包み込まれてゆく。

コクピットのコンソール、血液認証パネルの上に親指を押しあてる。

ほんのわずかな血液が、パネルから打ち出された採血針によってマシンに流れこむ。

遺伝子解析がおこなわれ全システム、起動準備を開始。

『キュインツ、キュツ、キュイイイイイイイイイイイインンンンンンンンンンンンツツツ』

愛騎が起動した。

起動時の、金属の擦れ合う、かるやかな高音が格納庫の壁に反響する。

クラッチレバーを握りしめ、アクセルグリップを回してゆく。

マミヤの両の瞳、光彩が爛々と輝く。

その強さを増し始める。

少年の発する？人工の魔導エネルギー？と

マシン本体の燃料タンクにセットされた魔導石、

そのふたつのパワーが相手を認識しあい、対消滅を始め出す。

パイロットと魔導二輪装甲車輛、二種類の魔導エネルギーの対消滅したときこそ、

マシンの走行性能も、武装のコントロールも、すべてのスペックを十全に発揮できる。

そう、対消滅の瞬間、魔導エネルギーの、蒼白色のパワーが爆発的に発生するのだ。

魔導メーター、その回転数が上昇を始める。少年が歯を堅く食いしばってゆく。

……五四七、

一八三九、

五八九二、八九九四、九九七三——。一万〇〇九四。

六秒で一万を超える、魔導爆燃機関、臨界を突破、走行可能域に突入する。

『グオオオオオオオオオオオオウウウウウウウウウルルルルルルルルルンンンンンンツツツ』

音がかわる、爆音にとってかわる。

さらにアクセルグリップを回す、

スロットル開度を全開へ——。

第一六戦目でキャロルと対戦したとき三万がやっと、それだけしか出さなかった。

出そうとしなかった、

それがいま――。

三万五七八一、

四万八九〇六、

五万七八九九、七万二〇五五、一〇万九〇四三……………。

一一秒で一〇万オーバー。

魔導メーターが跳ね飛ぶ勢いで上がる、上がりつづける、  
レッドゾーン危険領域までぎりぎりのところへ。

全身の生気を、魔導エネルギーを吸われる、獣に喰われる感覚、  
生き血を吸られてゆく感覚に近いものがある。

後方、排気口から蒼白の炎が、彗星のように尾を引いて噴きだしている。

少年と魔導爆燃機関の魔導石のパワーが混じりあい、文字どおり  
燃焼し、消耗していった。

アクセルグリップをもどす。

下がる、魔導メーターは一気に下がっていった。

爆音は止み、排気口の彗星天体ショーも終わった。

『キュウウウウイイイインンンウウウウンツ、キンツ、  
キンツキンツ……キンツ』

水冷システムが魔導爆燃機関を冷却、冷温停止状態のステージに  
移行させる。

独特の、金属を鋭く弾くような音が鳴り始めた。

金属音は終息してゆき、冷温停止状態へ移行完了。  
クラッチレバーをもどす。

からやかな拍手が鳴った。何度も打ち鳴らされてくる。格納庫のドアのほうから、だった。

マミヤは騎乗したまま、右手のドアをふりむいた。

カグラ護民官が独り、拍手をしていた。

こちらへ歩きながら、

「きょう一日、お付き合いいただき恐縮です」

声には、中学校でみせるお遊びの雰囲気は微塵もない。

マシンのそばまでやってくる。

マミヤは両手、両脚をだらし、放り出した感じで騎乗していた。

「魔導メーター、排気音から察するに一一秒台で回転一〇万オーバ―、お見事です曹長」

「カグラさん、それくらい真面目に授業すればいいのに」

カグラ護民官はすこしだけ微笑んで、

「真面目にやってもやらなくても、みなさんは聴いてはくれませんか」

沈黙がおりた。

マミヤは大人の美女をまえにして、語るべき言葉をなんとかして紡ぎ出そうとしていた。

カグラは、それを待っていてくれる風情だった。

話してもいい、このオトナになら、

それがマミヤの結論だった。

きょう一日、彼女と話し合い、そしてマミヤの考えた末たどりついた答え。

「……ときどき、ちょっと、わからなくなることがあるんです」

「なんででしょう？」

「俺たち、なにをしてんだろっ、って、なんでこんな凄いマシンに乗ってまで、女の子たちをおっかけ回して、その……」

「ホウキをへし折る行為をしなければいけないのか、ですか？」

「……そうだよ、授業では絶対話さないよね？　獵騎兵たちが、勝利後に少女たちにする？　身体検査？　のこと」

「ええまあ、人権上、グレーゾーンを遥かにぶっちぎってますから」  
マミヤはただ、力なく頸をふるばかりだった。

カグラは毅然とした態度で、

「魔導少女症候群、

正式には？　グレコイグレスias症候群？　を発症した少女には、かならず胸から太ももにかけての肌のどこかに痣が生じます、通称、悪魔の紋章、この痣の消滅が、症候群の完治を意味します、現場にて速やかに紋章消滅の存否を視診にて確認すること、

この医療行為は希有な特例として異端審問獵騎兵たちに厚労省より認可された権限です」

彼女のよどみのない言葉、その一言一句にマミヤはうなずき返していった。

「そして痣を消滅させるには、

少女たちの発する魔導エネルギーを消費させつつけるしかありません、

それ以外方法は無いです。

彼女たちに必死になってもらうには、競争が、負ければ？　罰ゲーム？　の待ち受ける苛烈な競争が欠かせません。

そのためのインター杯、そのための視診です。

せめてうわべだけでも人権を守った上での、ぎりぎりの処置です」  
「それだよ、その視診が俺たち隊員の原動力なんだ、

みんなその瞬間、女の子を……したいように……する瞬間に飢えている、

だからこんな危険な任務をしてる、  
軍政府公認の賭博の対象にまでされても、それでもつつづけている

んだ、

勝てば賞金ボーナスの支給付きでね」

「心中、お察しします」

カグラが頭を下げてくる。

そんな彼女を横目に見ながら、マミヤは視線を床面に落として、

「初陣は、勝利の瞬間、最高だったんだ、

魔導少女のホウキをへし折ってやるのが、痛快でたまらなく快感だったんだ

……自分は、正義の、社会秩序の番人なんだ、ってバカみたいに思ってたんだ。

それが二勝目で嫌になった、

女の子が泣きだした瞬間、俺は……」

「……」

「……俺は……ゾクゾクきたんだよ、

女の子の涙を見て、一層ホウキをへし折ってやりたくなった、

どうしようもない衝動だった、

あの女の子の着てるパンツァーをひんむきたくってしょうがなくなっただんだ。

……俺は、最低の……クズだったんだ……いまでも、それは変わらない——」

「ご自身をお責めになることはありません、

彼女たちは要治療対象者です、

社会の治安維持のためにです、

覚醒時の危険な重力波爆発、中学校で先日ご経験されたはずです」

「カグラさんは真っ先に逃げだしちゃったけどね」

「はい、私には生きてやり遂げる任務があります、

勇敢な獵騎兵殿が二名もいらっしゃいましたので、現場をお任せ

いたしました」

「汚いなあ、オトナって……いつも」

「己自身の身の内にある清濁をいかに見極めるか、これが大人の指標です」

「……」

「改めてお願い申しあげます、

曹長、？魔導の姫？との試合にエントリーなさってください、

その後は我々が手筈を整えます。

あの少女に勝てるのは、現在、世界中で貴官をおいてほかにはありません、

？あの少女の命を救える？のも、貴官をおいてほかにはおりません」

深く、カグラは深く、礼を尽くし頭を下げてくる。

マミヤは、コクピット、左右のグリップを握りしめた。

魔導メーターを見つめる。

いま目盛はゼロの位置にあった。

時計回りに一、二、三……目盛の一が一万魔導力場展開を意味する。

……一〇、一一、ここを過ぎると表示が赤く塗られている、  
危険領域を示す目盛だ、  
レッドゾーン

一二、一三、一四、一五。以上。

一五……絶対危険領域、一五——。

その最高値を見つめつづけながら、

「……闘うしかないんですよね？」

？魔導の姫？と、彼女の？希望の悲鳴？と？  
ゲシユライ・トラウム



マミヤは、自分自身に問いかけるかのようにつぶやいた。

「はい、曹長」

「姫の正体……やっぱりわからないままですか？」

「はい、ドイツまで部下を派遣しておりますが、未だ不明のままです」

「きょうカグラさんが教えてくれた話、すぐには、やっぱり信じられなくて……」

「無理ありません、ですが——」

いいよどもカグラを見て、マミヤがやさしく微笑んだ。

「だいじょうぶ、大隊格納庫には盗聴器こくしきの類はないですよ」

「——ですが我々の内偵調査の結果、ほぼまちがいは無い、そう断言いたします」

「……ほんとうに？」

「はい、軍政異端審問局は本気です、

大佐は、？魔導の姫の暗殺指令書？に署名を済ませています。

このままでは姫は、つぎのインター杯のレース中、？不慮の事故死？を遂げる運命です」

「そうなる前、に？」

「事故の起こされるまえに、曹長がお勝ちになってレースを終わらせる意外、

姫を救える道はありません」

格納庫の壁、デジタル時計があった、

いま日付がかわった、〇〇〇〇（まるまるまるまる）時の電子音が、格納庫内に鳴り響いた。

## お風呂場の女子会〜ホテル・ユリスモールにて〜

ユリスモールカフェの裏手にはちいさな林がひろがっていた。  
常緑樹の高木、ブルーヘヴンの木立がほそく天高く、  
空に突き刺さるかのよう<sup>パティオ</sup>に鋭く伸びている。

木立に囲まれて、三階建ての古風な洋館があった。  
ホテル・ユリスモールである。

正方形の洋館は、中央が吹き抜けになっており、  
中庭を形づくっている。

一階の大浴場、すこし開いた窓から湯気が中庭へと漏れ出ていた。  
少女たちの笑い声が聞こえる。

四、五人が一度に入れるバスタブが湯気を立ちのぼらせている。  
初夏の深夜、おだやかな風が吹きすぎてゆく。

エリカはバスタブに肩まで浸かり、縁にあごを乗せていた。

ロングヘアをタオルで巻いている。お湯で熱った額に、頬に、う  
なじに、

じんわり、汗が滲んでなんだか色っぽい。

A四サイズの紙を両手にもってひたすら見入っていた。

Eペーパー。文字どおり紙状、極薄の防水型携帯端末である。

紙面には、ネットでクレジット決済後ダウンロードした雑誌が映  
っていた。

〈月刊ジュニアスクールガール〉の九月号だ。

特集は《夏本番！ 今年の夏こそ彼氏をゲット！ 必殺テク総特  
集！》

と謳っている。

「？姫っ？、なーに見てんのさっきっからっ」  
キャロルが威勢よく叫んでくる。

チハヤの小麦色の四肢と日焼けしていない白い貧乳に腰、背中を泡いっぱいにして、

ボディスポンジで洗ってやっている。

「うん、ちよっと、ね」

エリカは優美な眉根をすこしばかり困惑げに曲げている。

《さあ狙った獲物、いやいや彼氏にマニュアルステップ二で挙げたように、

危険な贈り物、ちゃんとあげたかな？

目の前でショーツを脱いで放り投げてやれば、オトコなんであつという間にイチコロ！

あなたに夢中！ ステップ一で書いたように、  
あなたが怒っているのがちゃんと伝わってれば、女の子が主導権を握るのはカンタン！》

うんうん、と紙面の文字にエリカがうなづく。

「ほーんとっ、姫ってつくづくマニュアル女子だよねーっ」

キャロルもそういつてうなずいた。ゆたかな胸のまえで腕組みをしている。

チハヤがキャロルの肩越しから恥ずかしげにのぞきこんできた。

「なっ、なによっあんたたちっ」

キャロルは大笑いして、

「いままでヤローに見向きもしなかったあの？魔導の姫？がねえーっ、

よりによって初めてのオトコが審問猟騎兵？

なんのジョークよっっー感じじゃんっ」

なあ？ チハヤッ、そういつてがしがしとチハヤのお湯に濡れた髪の毛をなでぐり回す。

「い、痛いよう、キャロルッ」

エリカは、いちゃいちゃしているふたりの少女を見ながら、

「そういうんじゃないし、ちがうし、遊びだし」

「またまたあーっ、いまさら隠すなよっ」

「といってキャロルが顔を近づけてきて、

「相手のマミヤくんはアンタの正体知らないんだから、かわいいそうじゃない？」

ウチら魔導少女と、ウチらを狩るのが使命の獵騎兵、

こりゃあ叶わぬ恋だわーっ、ってか、フツーに考えて異性交遊許可証、絶対下りないよ？」

チハヤがふたりのそばに近づいてきた。

「たぶんね、姫はマミヤさんがね、一五連敗してクビになるのを待っていると思うの」

「あっ、そっか、マミヤくん？カド番？だったっけっ？」

「マミヤさんて私たちの？恩人？みたいな感じだよね？ だからなんだか複雑……」

チハヤがそういうと、キャロルの顔から笑顔が抜けおちていった。エリカは不敵な、それでいてなんとも苦り切った嫌そうな表情をうかべてくる。

それから、ふんっ、と無理矢理笑みをつくって、

「だからっジョークッだって、私別にあいつの負け望んでないし、異性交遊望んでないしっ」

キャロルは、途端、そうはかんたんにダメされないぞ、っとそんな感じに邪悪に微笑んで、

「ただのジョーク？ そんだけでショーツを犠牲にしたの、そんなけのためにー？」

「そうよっ」

「ねえ姫、あの渡したショーツ、いくらした？」

「やつすいヤツよ、まえに買って一度も履いたことなかった安物だけど、それがなにか？」

ふたりの言い合いにチハヤが首を突っこんできて、

「あの、私このまえ姫の買い物つきあったんだけど――」

「ちよっ、チハヤツ」

慌てるエリカを尻目に、キャロルが、

「なに？　そんでなによチハヤツ？」

「一万八千円のシルクの白いショーツ、買ってたよ、まちがいなくソレが渡したショーツだと思うの」

キャロルが、ニヤアーツ、とした笑いを見せてくる。

チハヤも興味津々にエリカを見てくる。

「姫のウソツキーツ、たっち悪うーっ」

キャロルがそういつて笑いころげる。

跳ねたお湯とボディシャンプーの泡が宙に舞った。

「な、なによっなんか文句あんのっ？」

そう叫ぶ——戦闘態勢に入った猫のような——エリカの肩に、キャロルが腕を回してきた。

姫はーっ、惚れた男に一途ーっ、ヘンな調子で彼女は、この夏流行りのラブソングの替え歌をつくって、冷やかしてくる。

「なによっ、は、恥ずかしかったんだからっ、渡したあと死ぬほど恥ずかしかったんだからっ、やれるもんならキャロルもやってみなさいよっ」

「姫はあーっ、好きなオトコにはー、恥ずかしくってもーっ、死ぬ気でショーツを渡すーっ」

「なによそのヘンな替え歌っ」

そこへ、浴室のホームセキュリティコンソールから、アラームが鳴り出した。

エリカとキャロルの売り言葉に買い言葉の口喧嘩がやんだ。

「んー、なんだろ？」

キャロルが立ちあがり、コンソールの画面を見る。

「げっ、噂をすれば姫にとって運命のオトコ、マミヤ曹長がカフェのまえにきてるっ」

「え、ウソッ」

エリカの声がうわずった。

「マジだよほらあっ」

キャロルが画面を指さした。三人が見入る。

「マミヤ曹長だった。ドアのまえでいったりきたりをくりかえしては、

チャイムを押そうとして、ためらう様子を見せている。

「や、やややだっ、どうしよう、早く上がんなきゃっ」

エリカが取り乱し始める。バスタブから上がり、速攻で体を拭き始めた。

キャロルが、にんまり、見逃さないとばかりに笑ってくる。

「姫ーっ、ステップ三の勝負服と下着はOK？」

「え、あっ、もちろんだいじょうぶっ」

「それと夏場の汗のにおいをおさえるひかえめなオーデコロンはー？」

「よ、用意したっ」

「マミヤくんが迫ってきたらー？」

「マッ、マニユアルには、ステップ三では、いまはまだ、キスと軽く胸にタッチ以上は許しちゃダメって……」

そこで、そう、そこまで口を滑らしてから、

「魔導の姫？ことエリカ・ヴァンデル・メーアは、うしろにいるふたりの視線に気がついた。

ゆっくり、ふりかえる。

キャロルの、してやったり、のニヤ笑い、エリカという、勝てそうにないライバル出現による、チハヤの哀しげな潤んだ瞳……。

「なあに？ この私に？ ？魔導の姫？になんか文句でもあるの？」

「——ッ全力で本気モードじゃ——————んっ、姫エエ——————ッ」

「ち、ちがうってなにバカいってんのキャロルッたらっ、わかったっ、あんたこそ……さてはマミヤ狙ってんでしょー」

「はあっ？ このワタシが？ そ、そりゃ負けてくれた恩義は感じて  
るわよ、でも——」

「ほーらやっぱりきっかけはそれじゃないのよっ、そうに決まってるっ」

「はああっ？ なっ、なによーっ、いくら姫でも勝手なこといわせないんだからねーっ」

エリカとキャロルは一糸まとわぬすっぱんぽんで、

取っ組み合い寸前の口喧嘩に突入してしまった。

口ではおさまりきらず、ふたりは実力行使に突入した。

エリカがお風呂のお湯をキャロルの顔にぶっかけた。

キャロルがお返しとばかり、ボディシャンプーで泡の立ったスポンジをぶん投げてくる。

ふたりの脇を、おなじくすっぱんぽんのチハヤが、

そろそろっ、と抜き足差し足忍び足で出ていくのに、ヒートアップしたふたりは気づかなかった。

## マミヤの意志

時刻は〇二〇〇（まるふたまるまる）時をまわっていた。

睡眠時間の減少したこの時代といえど、下級生の、しかも女子の家を訪問するには著しく常識を欠く時間帯といえる。

なりふり構ってはいられなかったのだ。

マミヤはいてもたってもいられず、ユリスモールカフェへと足をむけてしまった。

あの少女に逢いたかったから。

ひと目、エリカの貌を見たかったから、どうしようもなく、見たかったから。

赤レンガの建物、イングリシユアイビーの蔓の絡まった壁面を見上げる。

あんなものを放って渡され、あんな別れ方をして、学校外でどんな顔をして逢えばよいのやら、さっぱり見当もつかない。

そうこうするうち、時間だけが過ぎてゆく。

やはり、帰ろう、そう思い、踵を返したときだった。

かちやり、エントランスのドアがほんのすこし開いた。

マミヤがうしろをふりかえる。

開いたドアの隙間から、じいー、とチハヤがこっちをのぞき見ていた。

「あの、チハヤくん」

マミヤが声をかけると同時に、

「好き……」

チハヤは蚊の鳴くような声でささやいた。

瞳を潤ませながら、決意を固めた様子で眼力がとんでもなく強い。



「……チハヤくん？」

ぱたん、  
ドアが閉じられてしまう。

音を立てるのを怯えているかのように。

彼女のたった一言、不意の一撃を食らい、ドアのまえに立ちすくんでいると、

またドアがすこしだけ開いてきた。

チハヤがやつぱり隙間から外の道路を、マミヤのほうを潤んだ瞳で見つめてくる。

「チハヤくん、あの――」

「好き……」

また、ささやいた。瞳が潤みすぎて泣き出す寸前である。

ママは頬を赤く染めながら、

「いや、そういうことは、女子がだね、軽々しくいわないほうが、その――」

「チハヤは、平気ですよ？」

「え？」

「私が、もしもまた暴走したら、呪符で拘束してくださいね、」

チハヤは、チハヤは我慢します、マミヤ先輩になら縛られても、

チハヤ、平氣」

「チハヤ、  
くん」

マミヤがしどろもどろになった。

そのとき大声が聞こえてきた。

「なあーにいつとんじゃあつ、こんのクソガキヤアアアアアア  
アアアアーーーーッ」

キャロルの声だ、カフェの奥から響いてくる。

すかさずうしろからチハヤを羽交い締めにした。

チハヤが口をぱくぱくさせて、

「た、助けてー」

どうにも抑揚の乏しい、頼りのない悲鳴を上げた。

「ひかえめな態度を見せておいて、私たちをさしおいて抜け駆けするとは、怖ろしい子っ」

別の声が近づいてきた。

エリカだ、彼女が遅れてエントランスに顔を見せた。

「エ、エリカちゃん、助けてー」

チハヤの哀願に、

エリカは、

「転校からコッチ、まだ一週間のつきあいだけど見抜けなかったわ」

「お仕置きだからねチハヤッ」

キャロルがバスローブの胸元に、チハヤの顔を押しつけながら引っ立てていってしまった。

カフェの正面、マミヤとエリカ、ふたりつきりになる。

道路の街灯に照らされ、マミヤがエリカを直視できずに、立ちつくしていた。

エントランスの間接照明の灯りの下、エリカがバスローブを着てそっぽをむいている。

湯上がり彼女は、頬を薄く桃色に上気させ、

白い肌には湯の滴と初夏の汗をじんわり、にじませている。

「こんな夜になんか御用？ 審問官さん？」

「猟騎兵だ、いや、その」

マミヤは、足もとに視線を落とした。

「きみの顔が、見たくって、それだけで」

自分自身、どんな顔をしていいのかがわからない。

夢中で言葉を探す。

「見れて、よかった」

彼女は黙りこんでいる。

「じゃあ、帰るから、こんな遅くに悪かった、ごめん」

「別に、悪いなんていってないじゃない？ なんていちいち謝るの

よ」

エリカは瞳を逸らしながら、つつけんどんにいつてきた。

「ご用件は？　ほんとは何をいいにきたの？」

詰問され、マミヤは貧乏揺すりのように体を動かしてから、それから――。

顔を、あげた。

「近々、おおきなレースに……出るかも知れないんだ」

「そう？　お相手は？　その魔導少女は強いのか？」

マミヤは肩をすくめて、

「うん。とても、とっても、強い」

「貴方たしかカド番だったわよね……こんどは本気を出すおつもり？　それともまた――」

「これで失礼する」

エリカが、まだ何かをいいかけようとした。

カフェのなかから、ホームテレフォンの着信ベルがけたたましく聞こえてきた。

それを合図にしたかのように、マミヤは走りだした。

カフェのほうをふり返ることもなしに。

## エリカのほんとうの想い

カフェに通話してきた相手は、  
魔導の姫こと、エリカ・ヴァンデル・メーアのスポンサー企業の重役だった。

テレフォンのビデオ画面、  
その中年男は肥満した体を特注サイズのエグゼクティブチェアに無理矢理押しこむようにして座っている。

オフィスは控えめの間接照明で薄暗い。

エリカには、ビンに無理矢理押し込められたフォアグラが暗闇で笑っているように見えた。

カフェの一階、

テレフォン端末のまえで、彼女は体のシルエットを男に見透かされないよう、

サマーセーターとロングスカートで防御していた。

この男の、いつも少女を値踏みする目つきが大っ嫌いだったからである。

男はフォアグラのトリュフソース添えに舌鼓をうちながら上機嫌に話していた。

「いやあきょうはめでたいすよ姫、難航していたつぎのレースの対戦相手ですが、

ニッポンの猟騎兵どもが何人かエントリーしてきております」

「それはどうもミスター・シャハト、で、こんど私の倒す犬っころはどんな連中？」

「まず前回瞬殺されたシゲミツ中佐が最初にエントリーしましたぞ」  
「あら、学習能力ないのね、日本のトップエースさんてば」

シャハトという名の重役は、エントリーしてきた幾人かの猟騎兵らの名前を挙げていった。

エリカが長い髪をかき上げながら、

うざったそうに聞き流してゆく。

「最後に……なんの冗談だか、G?でカード番をむかえてる若手がひとりエントリーしましてな」

彼女の髪をいじる手がとまる。

ついさっきの、マミヤの言葉が甦った。

——?うん。とても、とっても、強い?あのひとはそういった、

強い、魔導少女。

「そのワンちゃん、名前は?」

「マミヤ、階級は曹長、戦績二勝一四敗、一五連敗した獵騎兵は分限免職されるのが世界の公式ルールです、ニッポンリーグでもたしかそのはずですな、この若僧なにを考えているのやら」

「ラストに、私に負けて引退の花道でも飾るつもりかしらね」  
シャハトはエリカの言葉に大笑して、またフォアグラをフォークで口に運んだ。

「ええと、ではマミヤ曹長のエントリーは拒否でよろしいですな?」  
「受けて立つわっ」

叫んだ、エリカは叫んでいた。

声の裏返りそうになるのを懸命にこらえながら。

シャハトは、フォークのフォアグラを皿に取り落とした。

啞然とした様子で、

「ですが、姫とこの曹長ではレースが成立するかどうか、オッズもどうなることやら、我がヘルマン&ハインeman社としましては、

G?の名に恥じない、後世に語り継がれるレース展開を希望している次第です」

「私が憐れなそのカード番獵騎兵殿に引退の華を添えて見送ってあげる、

この魔導の姫が直々によ、

H&H社はいつもどおり前宣伝にお金をかけて盛りあげてくれればそれでいいわ」

自然と口調が早口になってくる。少女の心の泉が波立つ。

フォアグラの材料の犠牲となったガチョウたちがその泉で一斉に水浴びを始めて、

少女の感情の襞に波紋をひろげまくっている。

フォアグラども自重しろよ、エリカはつぶやいた。

「は？ 姫？」

「なんでもないわ、とにかく私のおしりを追いかけてようってゆうバカ犬さんたち、

全員葬ってあげるから、ミスター・シャハトはしっかり契約を結んでください、

よろしいかしらっ」

シャハトはエリカの剣幕に驚いた様子だったけれど、あの姫の最終決定である、逆らうことはできない。

愛想笑いをうかべながら、姫のおっしゃるとおりに、そういつて通話を切った。

一二歳の少女はカフェのホールでひとり立っていた。

周囲に誰もいないのを確かめる。

くすくすっ、とうれしさのあまり忍び笑いを漏らし始めた。

ロングスカートのポケットからリストタブレットをとりだす。保存してある動画を呼び出した。

G?の初陣で圧勝したマミヤ、その少年が満面の笑顔を見せる勝利インタビューの海外配信動画だった。報道記者たち<sup>プレス</sup>に囲まれた少年はよろこび、栄光に輝いて見えた。

エリカはうつとり、眺めやってから、

「ねえマミヤ、魔導少女<sup>わたしたち</sup>を氣遣って一四連敗してくれていままでありがとう、

私が、この魔導の姫が、

貴方を苦痛から解放してあげるからね、

私に負けて晴れて政府の番犬をクビになったら、もうだいじょうぶっ、

貴方が猟騎兵をクビになれば、私と貴方の異性交遊許可証だって下りるわ、

ってゆーかトーキョー都にお金積んで下ろさせてみせるからっ」

少女はうつとり、動画を見つめながら、

「ほんっと、貴方ってば、実力を隠してきたからって、

よりによってカド番のときこの私に挑戦を仕掛けてくるなんて、調子のりすぎっ、おてんばさんだぞーっ」

さらにリスタブの画面に頬ずりしながら、

「もうっ、まさかとは思うけど、魔導の姫のほうに恋しちゃったんじゃないでしょうね？」

世界の頂点に立つ姫のハウキをへし折りたくなっちゃったの？

姫のカラダ、見たくなっちゃったの？

だとしたら浮気だぞ？　ダーリンッたらっ、

この、うつ、わっ、きっ、モ、ノッ」

エリカの妄想はとまらない。

インター杯勝利後の自分のイメトレをやり始めた。

彼女のイメージのなかで、マミヤ曹長は屈辱に全身を震わせている。

エリカがその前に立ちはだかっている。

そしておもむろにローズレッドのヘルメットを脱ぎ捨てるのだ。

彼女は膝を屈して両手をひろげ、負けた——ことになっている——マミヤのマネを始めだした。

声色をかえて、

「君がっ、ま、まさか、魔導の姫がエリカッ、君そのひとだったなんて知らなかったっ」

彼女はすかさず体の立ち位置を入れ替える。

魔導の姫たる本人役を始めだした。

「そう、この私が魔導の姫……貴方の力量では一〇〇万年ほどエントリーが早かったようね」

マミヤ少年にチェンジ。

「俺は、なんて、浅はかで、スカした、身の程知らずのストコドッコイだったんだろうっ」

両手で美しい黒髪につつまれた頭を掻きむしる演技をするエリカ。またしても立ち位置をチェンジして、

「おかわいそうに……貴方、猟騎兵以外になんの取り柄もないことだし余生はニート確定だわ」

くるりとふりむいて、

膝を屈し、両手を高々と掲げながら、

「ああ、お、俺はこれからどうすればいいのだろうかーっ」

エリカはまるでその場にマミヤがいるかのように、  
空気<sup>エア</sup>マミヤをやさしげに抱きしめるポーズを取った。

「だいじょうぶよ、私の可愛いワンコちゃん、

私とい、異性、異性、交遊を、コホンッ、

この私が貴方をこれからずーとっ、やっ、養ってってあげるからっ」

いつもの冷め切った仮面を脱ぎ捨て、可愛らしい一二歳の恋する女の子の貌になる。

ほっぺたを真っ赤っかにして、両腕を自分で自分の体に巻きつけている。

ひとりハグ、である。



エリカは瞳を潤ませながら、声音をかえるのみたいに忘れ、

「……ひ、姫ーっ」

チェンジ。

「いやっ、エリカ、って呼んでくれなきゃイーヤーなーのーっ」

一人二役を演じ終えた。

ひとりハグの両腕に回す力が、ぎゅっ、と強まる。

腕の中美しい小ぶりの胸が、ふわん、と形をかえる。

「……………ふふっ、私ったらどうしよう？　とうとう言っちゃったっ」

上気した頬に両手をやる。恥ずかしさのあまり——だったら最初っから小芝居なんかするなよって話なんだが——貌を覆って、未だ幼いながらも未発達の美しいボディラインをふわりふわり、と揺すりまくった。一二歳とは思えない、艶のある腰とおしりのくねり具合である。

ふわふわダンスが始まった途端、カフェの裏手のドアから爆笑がおきた。

キャロルとチハヤである。

ふたりして今まで気配を殺して——魔導少女の能力である——気づかれぬよう、エリカの小芝居の一部始終を見ていたのはまちがない。

キャロルはドアをガシガシぶっ叩いて涙を流して笑っている。

チハヤはまだ幼い小麦色の体を、くにゃん、と曲げて笑いの発作に全身を震わせていた。

ふたりが抱き合って、笑い死にの発作をどうにか食いとめる。

キャロルがマミヤの声音で、

「ひっ姫、ひめえええええっつっ」

チハヤがエリカの口真似というにはあまりにお粗末だったけれど、「いやなのー、ちはや、じゃなかったー、えりかつ、て呼んでくれ

ないと、いやなのー」

その舌っ足らずな棒読み演技に、キャロルが腹を抱えながら、「きゃっ、ワタシったら、どうしよう、とうとう色ボケで頭のほうがイっちゃったあっ」

ふたりして涙を流し何度も笑いころげた。

姫のふわふわダンスの真似をしながら。

少女たちのおしりがその都度、ふわんふわん、悩ましい動きを見せる。

エリカは、素の無表情になった。

なんとゆうか男の子が良くない本を見ながら、

良くないことをしている最中、ママに部屋のドアを開けられ突入を許してしまった、

そう、あの世紀の瞬間の表情となっている。

男の矜持と女の矜持、崩壊するときは、

まあ、どっちも似たり寄ったりなものなんであろう。

その顔つきのまま、つかつかとキッチンへ入っていった。

「あれ、姫ー？」

キャロルが笑いを引っこめる。いぶかしんでいると、

世界に冠たる魔導の姫は出てきた。

肉切り包丁二本持って。

「お前らコロす」

いった、彼女は言い切った。

声が半ば本気っぽかったりする。

？世界の姫？の貫禄をすでに取りもどしていた。

姫は、コロす、ぶっコロす、そうぶつぶつ、と物騒なことをつぶやきながら突進してきた。

肉切り包丁二本を水平にして——これはマジで刺すときの恰好だ

——刺突の姿勢になっている。

裏手のドアにだらしなく寄りかかっていたふたりが身を翻す。

一目散にホテルにむかって逃げだす。

混じりつけ無しの絶叫を上げて。

エリカは包丁もったまんま、呪法誘導ミサイル弾もびっくりの速さ、

ひたすら全速力でふたりを追尾した。

そのうつくしい貌に薄笑いをうかべながら。

## 怒りのナホ

夜空を見上げれば、無数のエアマシンたちが飛びかっていた。その放つ光の奔流が流星のように尾を引いている。

マミヤは遙か高空を仰ぎ見るのをやめた。

見飽きた人工の天体ショーだ。

おおきなマロニエの並木道をエアポート目指して歩いてゆく。

中学の夏服が汗を吸って不快だった。

暑さのせいではない、嫌な脂汗が流れてくる。

嫌でも、甦ってくる、カグラ護民官との会話が。

この汗は、その記憶のせいだった。

押しつぶされそうになる、彼女の言葉に、それゆえのプレッシャーに。

だから逢いにいった、エリカに逢いにいった、  
なんとしても逢って、あの貌を一目見たかったからだ。

逢ったからってどうなるとゆうもんでもない。そんなことはよくわかつている。

わかつてはいたけれど。

重苦しい物思いにふけるのをやめた。

視線に気がついたのだ。

ふたつの視線に。

マロニエの大木の陰にふたり、少年と少女が、佇んでいた。

こちらを見据え、歩いてくる。

突拍子もない、実に奇妙な組み合わせのふたりだった。

「ナホ、どうしてここへ？」

私服に着替えたナホは一五歳の女子力真っ盛りのきれいな瞳をむけてきた。

マミヤのまえで腕を組んでふんぞり返る。

どうやらずいぶんとお怒りのご様子だ。

ポニーテールを揺らしながら、

「このナルシスバカ中尉から話は聞いたわ」

「口を慎みたまえ、暴力女」

ソルベ中尉が彼女のとなり立っている。

こいつだけは実に鬱陶しいので、マミヤは無視を決めこむことにした。

ナホだけを見ながら、

「ふたりでいっしょに帰ろう、ナホ？ もう時間も遅いし」

「おい、こら、僕は無視されるのが大嫌いなんだっ」

案の定、ソルベが突っかかってくる。

「自称エリートは黙っててよっ」

「なんだとっ、せっかく教えてやったのに、この暴力女っ」

ふたりのけんか腰の言い合いが、疲れたマミヤの脳細胞に追い打ちをかけてくる。

「なあナホ、頼む、落ちついて聞いてくれないか」

マミヤのうんざりした声音に、

ナホは引きつった笑みになって、

「あのさあ、あんたわかってる？ 審問猟騎兵がよりによって、

あの穢らわしい魔導少女のサバトに足繁く通うとか、正気なのっ？

ゴミンゴのヤツに目えつけられんのあたりまえじゃないっ、

その上、審問局から八百長の疑惑もたれたらどーすんのよーっ？」

「だから誤解だ、ナホ」

「あっ、そう？ じゃあその誤解をこれからみんなで解きにいきましょうっ」

「ちよっと、待ってくれ、何いってるんだ」

マミヤは猜疑心に満ちた視線をソルベに送った。

彼はニヤついてこっちを見返してくる。

無視を決めこんでいるわけにはいかなくなってきたようだ。

「彼女になにを吹きこんだんだ、中尉殿？」

「なにつて、ホントのことさ、曹長くん」

「さあいくわよふたりとも」

ナホが率先して歩きだす。

サバトへと、あのユリスモールカフェへと。

マミヤは硬直してふたりの後ろ姿を見やった。

いまから？ エリカに再び会っていったいなにをどう会話すればいいんだろうか。

## エリカVS・ナホ

魔導の姫は動きやすい軽装に着替えていた。

体のラインのうきあがったキャミソール、それにミニのフレアスカートを履いている。

カフェのカウンターの、両手をほそい腰にあてがい、

勝ち誇った笑みをうかべていた。

「まだよ、あんたたち、まだまだこれからよっ」

キャロルとチハヤは、パジャマ姿のまんま、カウンターのウインザーチェアに座らされている。

キャロルが、もう何度目かのギブアップを告げてくる。

「ねえ姫、ウチらが悪かったからもう、カンベンして……」

その声は、どこかうっとりしたような、哀願のような、官能的に潤んだ色を帯びていた。

「ダメよ、この程度で許すほど私は甘くないんだから」

「チハヤはまだまだ、平気だもん」

強がってるのか、それともホントに平気なのか、チハヤはけっこう余裕のおっとり顔だ。

「強情な子ねまったく、ならコッチは？ コッチならどうよっ？」

そういって、チハヤのまえに新しい皿をおいてやった。生クリームたっぷり、

チョコレートプディングのラズベリー添えである。

キャロルがプディングを横目で見て、一筋、白いきれいな頬に脂汗をしたたらせる。

恐怖した貌になる。

チハヤは、握りしめていたフォークをおいて、スプーンを手にとった。

「平気だもん」

スプーンで円筒形のプディングをこっそり崩して豪快に口に運ぶ。

焦げ茶色の塊が、ココアに卵黄にクリームに砂糖という高カロリー  
の怪物がちいさな口に吸いこまれていった。

チハヤは美味しそうに笑みをうかべた。

彼女はこれが九皿目だった。

キャロルはチハヤから眼を背け、自分の前に積まれた七枚の皿を  
見つめた。

「あした、体重量るのが死ぬほど怖い」

エリカは酷薄そうな笑みをうかべて、

「まだまだこれからよっ」

キャロルに新しい皿を用意してやる。

新鮮イチゴをふんだんにのせた生クリームとパイ生地 of 四重奏、  
ユリスモールカフェ特製ナポレオンパイであった。

「ワタシの大好物……八枚目を出すなんて卑怯よ姫っ」

エリカは、キャロルから奪い取っているリスタブでとっととクレ  
ジット決済を済ませてしまった。

これでキャロルはカフェでナポレオンパイを買ったことになる。

「嫌なら生ゴミに捨てるだけ、あんたの買った大好物のナポレオン  
パイをね」

「姫の意地悪っ、鬼畜、外道ーっ、オトコに平気でショーツ渡す痴  
女ーっ」

場がしん、と静まりかえる。

「……ダブルよ、ナポレオンパイ、ダブル、さあ、二皿いっぺんに  
いってみようか？」

エリカがもうひとつパイをキッチンからもってくる。

口を滑らせたキャロルは顔面蒼白だ。

チハヤが横から顔をのぞきこんでくるようにしてきて、

「キャロルってば自滅型だよねー」

涼しげにいった。



「うるさあーいっ、もう喰ってやる、体重がなによっ、喰ってやるってんだよっ」

キャロルは半べそかきながら、しゃにむにフォークを突き刺す。口に押しこんでいった。

「そうよその調子」

エリカは、魔導の姫——とゆうよりはほとんど暴君——の二つ名にふさわしい態度でふたりを見下ろした。

するとチハヤと目が合った。

彼女は姫に対して、

「平気ですよー」

にこっ、と笑い返してくる。

そういわれて黙っている暴君、いやいや姫ではなかった。

「チハヤにはブルーベリーパイデコレーション全部載せ、生クリーム添えを丸々ワンホールいっちゃってみようかつ」

それを聞いて、チハヤはうれしそうに微笑んだ。

キャロルは耳を塞いで震えている。

エリカがチハヤのリスタブでクレジット決済しようとしたとき——。

来客を告げるアラームが鳴った。

三人が、カウンターの壁に掛かっている監視モニタを見た。

映っているのは少年ふたり、少女ひとり。

「なんで？ どうしてマミヤったらもどってきたのっ？」

エリカがうれしい悲鳴を上げる。

キャロルはウインザーチェアを蹴っ飛ばして立ちあがる。

エントランスへ猛ダッシュして、

「マミヤーッ、ウチらを助けてえっ」

泣きながら内側のガラス扉を開けようとした。

チハヤが冷静な口調で、

「キャロルー、部外者の女の子がひとりいるから？ 顔バレ？ しちゃうよー」

「え、ああ、ヤバいじゃん」

キャロルはガラス扉のまえでふたりをふり返った。

チハヤも席を立つ。エリカにむかって、

「ねえねえ私たちのリスタブをね、返して欲しいの」

「あ？ ほらよっ」

姫はエントランスのほうに視線を釘付けにしながら、

ふたりのリスタブを無造作に床へと放り投げた。

チハヤはキャッチすると、キャロルにリスタブを渡してやった。

キャロルはすぐさまクレジットの利用記録をチェックし始めた。

「ワタシの今月の小遣いがあっ」

キャロルが叫んだ。

それでもちゃっかり、食べかけのナポレオンパイの皿を手にする。

ふたりは身を隠すため、そそくさと裏のドアからホテルへと帰っていった。

エリカがオートロックのドアを解錠してやる。

ナホが先頭切って、ホールに飛びこんでくる。

カフェの内装を一瞥して、すぐさまカウンターのエリカに照準を合わせてきた。

ナホとエリカは、相対した。

ふたりの間、カウンター越しの一メートルちよいの空間だけ、異様に熱くなってきた。

ふたりとも、無言のままだ。

ただひたすら周りの空気だけが、加熱してゆく。

ソルベは悠然とテーブル席に陣取る。

マミヤはというと、ふたりの女子からすこし離れたところで、

所在なげに突っ立っていた。

少年はいま、加熱クッキング中のオーブンレンジのまっただ中にいるのだった。

その証拠に、エリカもナホも、貌を紅潮させほつぺたをどんどん膨らましているではないか。

レンジでこんがり灼かれてゆくパイ生地のように。

美味しそうな感じにほどよくふくれっ面の女子二名に比べ、マミヤはしなびた春菊のようだった。

レンジの熱で水気が抜けて、苦みだけ残った不味い春菊。

実際、少年の顔のほうも春菊みたいに苦り切っていた。

口火を切ったのは、ナホからだった。

「一三年次のクツソガキの分際で、うちのクラスの男子にちよっかい出してくれちゃったのがいるってゆうから来てみれば、アンタがそんなのかなあっ？」

「さあ？ なんのことかしらセンパイ？」

「このバカ中尉から話は聞いてんのよっ、うちのマミヤのことよっ」

「おい、バカは余計だぞっ」

ソルベがテーブル席から跳びあがる。

「空気は黙ってなさいよっ」とナホ、

「黙れば？」

とエリカが同時に叱りつけるようにいった。

ソルベは怒りのふりおろす場所を求めるかのように、カフェのなか、視線を彷徨わせた。

エリカがナホを品定めする視線で上から下まで見つめて、

「うちの、マミヤ、いまそういったわね？ センパイ？」

「ええ、いったわよ、それがなによっ」

エリカは長い髪の手端をもてあそびながら、

「なにか、そう、なんでもいいわ、センパイと、

この審問官さんとのあいだになにか特別なものでもあるのかしら？」

「あるわっ、マミヤとは腐れ縁だからいろいろ知ってるものっ、

こいつの嫌いな食べ物、アンタ知ってる？ あたしは知ってるんだから、

春菊よっシュンギクーツ」

エリカは、くすくすつ、とそれは愉快そうに笑い出した。

「教えてくれてありがとうセンパイ、彼が店にきたときは料理に入れないようにするわ、春菊」

「はああーっ？ あたしが来させないからっ、マミヤには二度とサバトには来させないわっ。」

彼は立派な異端審問猟騎兵なんだからっ、

こんなところで油売ってていいわきやないのよっ」

「でも、カド番だったわよね、審問官さん？」

エリカは腕を組むと、流し目をマミヤに送った。

ナホは憤懣やるかたない様子で、

「なにかいいかえしてやりなさいよっ」

「……ナホ」

「なによ？ アンタオトコでしょっ、

そんなシュンギク無理矢理喰わされたような顔してんじゃないわよーっ」

マミヤは、ますます立ち枯れた春菊のように腐って弱りきった表情になってしまった。

ソルベがそこで、ひとつ咳払いをしてきた。

「おいナホ、忘れてるものがあるんじゃないのかい？」

ナホがソルベのほうをふりむく。

舌打ちして、プリーツスカートのポケットから折りたたんだ書類をとりだしてきた。

ぴらん、とその紙きれを開いて、エリカの眼前に突きつける。

「異性交遊申請書よっ」

マミヤたちの中学校事務局に申請済み、そう印鑑の押印された申請書だった。

申請した日付は本日のもの。

申請者はナホ、交遊対象者の名前はマミヤだった。

署名欄には、当然ナホのほうは自筆でサイン済だ。

マミヤの署名欄だけが空欄となっている。

「あとはママのサインをもらうだけよ、これで学校で受理されれば晴れてあたしたちは、恋、恋っ、び、びとっ——」

「晴れて恋人同士になれる、ってわけね」

エリカがいった。いいよどむナホになりかわって。

けれどそれで引っ込むナホではない。

「……ムツかつくわね、エリカ・ヴァンデル・メーアッ、なにその余裕な態度、

あんた帰国子女だからって日本のガッコの上下カンケーなめてんじやないの？」

「センパイこそ大胆ね、本人の彼氏をまえにして、

？私を抱いて欲しいの、ママヤ？って宣言したも同然よね、その、紙きれ見せたってコトは？」

「このっ、こんのクソガキッ……」

ナホは顔面を可愛く真っ赤にして、言葉に行き詰まってしまった様子だ。

ママヤも、そうだった。

フライパンでソテーされちゃった春菊のように熱に火照りかえっていた。

ソルベひとり、怒気を漲らせていた。

あの強気で押すナホですら気圧されている場の展開に、当初の予定の外れだした雰囲気到我慢のならない様子である。

エリカはまるで一国の姫、いや女王のような貫禄で、三人を見回して、

「審問官さんも照れちゃってるようだし、この雰囲気じゃいいだせないわよね、本音を」

ナホはエリカを睨みつけ、

それからママヤに恋い焦がれる女の子の視線を送った。

ママヤはうつむいて、唇を噛みしめている。

「ママヤア……」

ナホがすすがるように、催促するように甘い声を出す。

「こうしましょう、センパイ方」

エリカは、裁定を下す女王よろしく厳かにしゃべりだした。

「さっきも話したように、この審問官さんはカード番をむかえてるわ、つぎのレースこそ必死に勝利を目指して頑張ろうとするでしょうね、だから彼が勝ったら、

そのときはその？私を抱いてくださいと惨めに懇願する申請書？にサインをする、

それでいいんじゃないかしら？」

場が、しん、と静まりかえる。

カフェの空気は、ついさっきまでオーブンレンジの灼熱地獄、二〇〇℃にも高温調理されていた。

ところがそれはいま、急転直下、粗熱もとらずに極寒のマグロ専用冷凍貯蔵庫に放りこまれたようになってしまっていた。

「ねえセンパイ、その？惨めに抱いてくださいと懇願する申請書を——」

「そのいい方やめてよっ」

エリカは、蒸気爆発寸前の圧力釜と化したナホを、ゆっくり、ほそめた瞳で凝視して、

「やだ、私としたことがごめんなさいねセンパイ、

その？私のところを、肉体をも思うがままに犯してください、ってマミヤに土下座で告白したも同然の書類？にサインした以上、センパイは当然この審問官さんの勝利のほうを願うわよね？」

ナホはぷるぷる、全身に怒りと羞恥の震えを奔らせながら、

「——当然、でしょう？好きなひとの——」

ちらっ、とマミヤのほうを盗み見る。マミヤは赤面してうつむいたままだ。

「——好きな男の子のがんばって勝つほうに賭けるに決まってんじゃないのよっ」

ソルベが慌てて、

「おいナホいいのかそれでっ？」

ナホはエリカにありったけの嫉妬の眼差しをむけながら、

「当然でしょっ、勝つのを願ってなにが悪いのよっバカ中尉っ」

「この能無し曹長は一四連敗中なんだぞ、カド番だぞっ、

負けるぞ、つぎのインター杯も負けてクビに決まってるんだぞっ」

「マミヤのことそれ以上侮辱したら殺すわよっ」

ナホの背中から殺気がじわり、

オーラとなって立ちのぼりだした。

ソルベは悲痛なうめき声を出して、

「おい、曹長、君の問題だぞ、君がはっきりとしないからいけないんだ、

何かいいたまえっ」

「そうよマミヤ、お願い、つぎこそ勝ってくれるよねっ？」

マミヤは、額の汗をハンカチでぬぐった。

エリカがミネラルウォーターをタンブラーに注いでカウンターにさしだしてくる。

マミヤが彼女を見つめて、

「……ありがとう」

「どういたしまして、ア、ナ、タッ」

エリカが腰をくねらせながら、

自分のハンカチでマミヤの頬をふいてきた。

うつとりとした流し目を、思わせぶりな瞳でマミヤを見つめてくる。

マミヤもナホ同様、蒸気爆発寸前の顔となってしまうた。

「……なに、してくれてんだテメエ」

ナホの声は陰にこもって、もう殺人音波の域に達し始めている。

エリカは、そんなナホに、

「私は彼が負けようとも構わないわ、傷心の彼を受け入れてみせる、

あら？　これ、恋に恋する域を超えた？愛？？

ってやつかも知れないわね」

「じゅ、一三のクソガキの分際で……なにふざけたことを又かして……」

「あらいやだ、まだ一二ですけど？」

エリカとナホが睨みあう。

カフェの空気は再び、マグロの死骸のならば冷凍庫から、華やぐパイ生地膨らむオーブンレンジに逆戻りになってきた。

「ナホ、エリカ、俺は勝つ」

——マミヤに、三人の視線が一瞬で集まる。

「マミヤッ」

ナホのうれしげに甘えた声といったら、それこそオトコなら速攻抱きしめたくなるくらい、初々しいものだった。

ソルベがおおきくうなずいて、

「よくいってくれたぞ曹長、つぎの対戦相手は決まってるのか？

エントリーは？　大佐も絶対G？でも最弱の相手をチョイスしてくれるだろうから、

安心して良いと思うぞ、うんっ」

この勘違い野郎は放置することにして、マミヤは先をつづけた。

「エントリーはもう申し込んである」

「誰だい、その最弱の可哀想な魔導少女は？　うん？」

ソルベがにんまりと笑んでくる。

ナホは先をうながすように何度もうなずいてくる。

「審問局を通して、相手の魔導少女のスポンサー企業に話がいって  
るんだ、

もうすぐ内定の返事がスポンサーから返ってくるはずだ」

ナホはインター杯のシステムに詳しいわけではない。

瞳を輝かして、マミヤの話のつづきをまっている。

ソルベは、ちがった。



「……曹長？　ははっ、馬鹿をいっちゃいけないな、スポンサー付きの相手といえばG？の中堅以上の手強い相手だぜ？君程度のエントリーなぞ、論外だ、即座に却下されるのに——」

マミヤは、この面倒くさいバカの説教を片手でさえぎった。自分の手首に巻かれたリストアブに見入る。

「返事のメール、もう来ていた」  
ソルベは大笑いしだした。

「どこのどいつだよ、そんな世間知らずの間抜けなスポンサーは？」

「ドイツのヘルマン&ハイネマン社だ」

マミヤの答えにソルベが、無表情になる。

どうやら思考停止に陥ってしまったようだ。

その社名、世界中の猟騎兵で知らない者など皆無だった。

そして、その世界的大企業の後援する魔導少女が、いったい誰であるのかも。

ナホが固まった中尉殿を不審げに見て、

「なあに？　その会社ってば誰のスポンサー？　ねえ相手の魔導少女は？」

マミヤは、ヘルマン&ハイネマン社からの正式な通知メールと、軍政異端審問局の競技杯出場指令書の添付されたメールとにらめっこをしていた。

それからナホを見つめ答えた。

「G？の？魔導の姫？だよ、ナホ」

## マミヤ、機長からションベン小僧呼ばわりされる

マミヤの乗りこんだエアマシンはえらく揺れて不快な空のフライトとなっていた。

パイロットは三十過ぎぐらいだろうか、マミヤよりよっぽどオトナではあるけれど、

自分の仕事に熟練した一人前のオトナとはお世辞にもいえない腕前だった。

首都上空の乱気流の中を平気で突っこんでいくのである。

男は乱流に乗るのを楽しんでいるようだった。

若者によくいる？空の暴走族？あがりのタイプの男だった。

民間タクシー会社に就職したのに、若いときの気分がまだ抜けきれていないのだろう。

マミヤは、揺れまくるキャビンの席で疲れきった体をあずけていた。

「パイロットさん、気流の上、飛んでもらえませんか？、酔いそうなんです」

若い男はただでさえ悪そうな目つきをさらに鋭くしてきた。

「うるせえよ中坊が、ガキのクセしてこんな時間によ、夜遊び朝帰りか？」

ああ？ 生意気な口たたいてっとお空に放り出すぞっ」

目つき同様、口も性格も残念な人物のようだった。

「でもまあアレだ、オメエみてえな陰気くせえガキは彼女のひとりもできたためしねえだろ」

そういつてコクピットでゲラゲラとひとり笑いだした。

笑いながら、テレビのチャンネルを二四時間放送の音楽番組に切りかえる。

大昔にメガヒットを飛ばしたクラシック・ロックが流れ出す。

マミヤもよく知っているくらいのメジャーなナンバーだ。

男は曲を口ずさみながら、

「おいガキ、この曲知ってつか？ 俺らの生まれるまえのグレートナンバーだぜ」

「ええ、知ってます」

「へっ、シヨンベン小僧でも知ってんのかよ、まあいいや、このバンドが現役のところはなあ、あの胸くそ悪い魔導少女ってのも異性交遊許可証なんてのも無かったんだぜ？

あのクソツタレの異端審問局のクソどもだって影も形も無かったんだ、信じられっか？」

「ええ、そうですね」

「けっ、おめえらガキでもガッコの倫理で習ってんだろ？ 異性交遊許可証？」

「ええ、習いました」

「おめえらシヨンベン小僧は十年早いとしてだな、俺らみてえなれっきとした大人でも、恋愛に許可のいる時代になるとは思ひもなかったぜ、つたくよ」

「まったくですね」

「この曲の時代はなあ、自由だったんだよ、ロックだったんだよ時代そのものがよお、

え？ 好きな女に告ってふられて、恋愛がいくらでも自由だったんだよ、自由っ」

「ですね」

「魔導少女がよ、あの魔女のガキどもが出てきちゃったせいだ、全部あいつらのせいだよ、

あいつらな？ 恋愛感情こじらせつと魔女のビョーキになるんだぜ、始末に負えねえよ、だからだよ、イチイチ国が恋愛取り締まる羽目になったんだよ、

審問局の軍人どもがエラそうにいばりくさってられんのも魔女のせいだよ、

おい聞いてんのかションベン？」

「ええ、そのとおりだと思いますよ、ただ、恋愛説はもっとも有力な仮説に過ぎません」

「ちっ、素直だといいてえとこだがテメエなんだか生意気だな？」

まさか審問局に俺のことチクるとか考えてんじゃねえだろうな？

あ？」

「そんなつまらないこと、しません」

「ったく、とにかくエアマシン乗りナメてんじゃねーよってコトよ？  
それに比べて猟騎兵のガキどもな？」

奴らクソガキのせいでスゲえマシン乗りやがってよお、

俺にも乗せろって話だよ、中坊のガキですら魔導二輪乗って魔女のケツおっかけてんだぜ？

勝てばご褒美にオンナのハダカ拝めてよ、ボーナスも出るんだぜ、ガキの分際で生意気ぶっこいてると思わねえか？」

「ええ、酷い職業だと思います」

「だろ？ でもよ、へへっ、ちょっと思うんだよなあ、

この俺様にも魔導石適性があつたらな、ってよ、

したら……まあ、なんだ、猟騎兵って人生も悪かあねえ、って思うワケよ」

「そうですか？」

「バカだろテメエ？ おいションベン？ 猟騎兵はスゲえマシンぶっ飛ばして、

勝てばオンナの着てるパンツァーひんむいてよ、

ハダカ見放題、賞金付きの人生だぜ？ ガキのうちからっ」

ママヤは眼を閉じた。

今夜はとりわけ、都内のスラムで暴動の火の手が上がっているのが目についたからだった。

少年にとって、正視できる地上の光景ではない。

男がコクピットのサイドウィンドウから地上を見る。

「今夜もど派手にやってやがんなあ貧民どもがよ、

俺様もよ、猟騎兵になつてりゃあ、あの下の高速を魔導二輪で、  
こうヴィイインッとよ、バカども蹴散らしてかつ飛ばしてたのにな  
あっ」

マミヤは眼を閉じたまま、

「機長さん、エアマシン乗りになりたかったんですか？」

それともほんとうは猟騎兵になりたかったんですか？」

ガラの悪い男は黙りこんだ。

「おいションベン、なにいつてやがるんだ？」

「機長さんの話を聞いていると、猟騎兵のほうに憧れているような  
気がしたんです、

よしたほうがいいです……あんな仕事、誇りもなにも、ありはしま  
せん」

男は呆氣にとられた様子だった。

間をおいてから歯をひんむいて笑い出した。

「傑作だぜションベン野郎っ、テメエさてはアレだろ？」

流行りのゲームでよ、ヴァーチャルゲームで猟騎兵をジョブに選  
んでよ、

そいつになりきっちゃって、その気になってんだろ、だろ？ 凶星  
だろ？」

そういつてまた愉快そうに嘲笑を浴びせてくる。

操縦桿を派手に動かして乱気流に乗るのを楽しんでいる。

マミヤは疲労と睡魔にとらわれていた。

ユリスモールカフェのこと。

くり返し、何度も、ついさっきまでの情景が思いだされて仕方な  
かった。

ナホ。泣かせてしまった。

彼女は泣いた。？魔導の姫？を相手に勝てるわけがないよ、そう  
いつてカフェのホールにへたりこんで泣き崩れたのだった。

エリカは、あるとき無表情だった。

彼女にもやはり思われたんだろうか？

魔導少女たちと間近に接してきた彼女のことだ、思ったはずだ、身の程知らずの馬鹿、だと。

帰宅するとき、マミヤはナホに送ってあげるよ、そういったわりながら申し出た。

あっさり、断られてしまった。

エアポートで皆、バラバラのマシンに乗りこんだのだった。

あのめんどくさい中尉殿もなにかを喚き散らしていたっけ、自分も絶対エントリーするとかなんとか、そんなことを。

マミヤとしては疲れるだけだから、ろくに聞いちゃいなかった。

コクピットの音楽番組が中断された。

『報道フロアから、臨時ニュースを申しあげます』

張りつめた女性の声。

マミヤは重たいまぶたをなんとか押し上げて、画面のほうに目をむけた。

テレビが報道スタジオに切りかわっている。

緊張した面持ちでアナウンサーの女性がスタジオのデスクに座っている。

画面上、スタッフの指示らしき指の動きにうなずいている。

おいなんだよこれ、おいっ番組中断すんなっ、とパイロットが怒鳴りだした。

気流で、がくんっ、とおおきく機体がまた揺れる。

『いま入ってきた最新情報によりますと、

都内と神奈川県の大規模なふたつの反政府デモ隊が合流しました、暴徒化した群衆が警察機動隊の手薄な箇所を突破、

南東京市周辺の市街地で放火と略奪がおきております、

未確認情報ですが、つい先日発生した魔導少女覚醒事件の容疑者の少女の自宅付近が……この地域を中心に放火がおこなわれている様子で——』

マミヤが、ハーネスに固定されていた上半身を跳ね起こす。

「ああ、やだねえ辛気くせえ、どっかほかのチャンネルねえかな」  
男がチャンネルを切りかえてしまう。

マミヤは慌てて、

「報道番組のチャンネルにしてください、暴動の詳細が知りたい」  
「ああ？ ションベンなにヌカしてんだよ？ 家帰ってママと朝イチのニュースでも見てろや」

マミヤのリスタブのバイブレータが震動する。

テレビのことはとりあえず放って、画面に見入った。

エリカから、だった。

『マミヤッ、いまどこっ？』

普段とはちがう、必死のエリカの表情、そして声。

「エアマシンに乗って帰宅中だった、チハヤちゃんは？」

『無事だよ、ご両親も避難してだいじょうぶだったけど』

「カフェのほうはっ？」

「ここは平気」

どっしり、マミヤは全身に冷や汗をかき始めていた。

かろうじて皆の無事を知り、安堵のため息をつくことができた。

『でも、チハヤがね、いま泣きだしていて、とっても不安定になっているのっ』

チハヤちゃんの？ 魔導少女の精神状態が、感情が不安定に？

それは、アーデルハイド暴走に陥る予兆を孕んでいる。

「審問局と護民局に通報は？」

『うんっ、さっきしたからっ、カフェに応援部隊送ってくれるってっ』

「俺も戻る」

エリカは何度も何度もうなずいてくる。

『お願いマミヤ、早く来てっお願いっ』

画面の中のエリカが左横を見た。なにか叫ぼうとしたところで、映像は途切れてしまった。

マミヤが顔を上げる。

パイロットの男が、コクピットのシート越しにこっちのリスタブをのぞきこんでいた。

「おいションベン、いまの子すんげえカワイコちゃんじゃねえかよ、テメエまさか彼女じゃねえだろうな？ ああ？」

「お願いしますっ、すぐに元のエアポートにもどってください、いますぐっ」

「はあ？ バーカッ、あそこはデモ隊の暴れてる近くじゃねえかよ、もどるわけねえだろがっ」

マミヤはサマージャケットの懷から、？伝家の宝刀？をとりだすことにした。

一瞬の迷いも無かった。

権力を振りかざすようで、いままで使ったことはなかったけれど。出した、身分証明書を。

二つ折りの身分証を開いて、パイロットの鼻っ面に突きつける。

「軍政異端審問局のマミヤ曹長です、有事につきこのエアマシンを接收します、

このマシンに物的被害の出たときには、

軍政府に対して損害賠償請求の権利が貴殿には認められています」

目つきの悪いパイロットは、口をあんどりと開けながらマミヤ曹長を見てきた。

ションベンくせえ中坊のガキを乗せたはずだと思っていたら、

その正体は自分の敬愛してやまないロックミュージシャンの生まれ変わりのお姿だった、

彼にとってしてみれば、まさにそんな風な驚天動地の展開だった。

「……あ、あんた、その歳でってコトは、天下の異端審問獵騎兵……さま？」

「早くもどってください、接收指示に従わない場合、

貴殿に刑事罰を科さねばなりません、お願いです早くっ」

「——は、はいいつ、お、おっしゃるとおりにいたしますです、



はいいいいいっ」

男が金切り声を上げ、すぐさま機体をターンさせる。

「そっ、曹長殿、質問がありますっ」

マミヤはそれどころではなかった。

キャビンのサイドウィンドウから地上を食い入るように見始める。

「あとう、曹長殿っ、魔女のパンツァー脱がすのって、やっぱサイコーの気分ッスかねっ？」

「機長早くっ、無駄口たたかないでっ」

「はいっ、わかりました、わかりましたから俺が審問局の悪口いつたの密告しないでねーっ」

男は目つきも顔つきもがらりとかえた。

気流に乗って遊ぶのもやめ、カフェにむかって操縦桿をきる。

マシンはフルスピードで暁の空を飛行してゆく。

マミヤの見つめる眼下には、暴徒の放火した暗赤色の点がつぎつぎとつながり、線と化しつつあった。

マシンの飛翔する高空にまで、猛煙はひろがりを見せ始めていた。

## 無力感

マミヤがエアマシンで駆けつけたとき、空から最初に見た光景は、ブルーヘヴンの木立の倒壊だった。

？外の世間様？とつながるカフェと奥まったホテルとのあいだの木立、

高木が空に突き刺さるように鋭く伸びていたのに。

それがいま、何本もなぎ倒されている。

まるで怪物が暴れていった痕のようだった。

そう、？怪物？が――。

タクシーの機長はとても親切になってくれており、ホテル・ユリスモール屋上のちいさなエアポートにマシンを着陸させてくれた。

おそらくは異端審問局のトラブルに巻きこまれたくないのだろう、マミヤを降ろすとすぐさま離陸して去っていった。

ホテルの玄関前のちよつとした広場や、

中庭<sup>パティオ</sup>やらにはすでに当局の軍用エアマシンが数台、強行着陸している。

「みんな無事でいてくれっ」

三階建ての――人の姿の見あたらない――ホテルの螺旋階段を駆け下りながら、

そう祈らざるを得なかった。

マミヤはホテルの正面玄関から外へと飛び出した。

眼前、軍政異端審問局のエアマシンが駐機している。

ランディングライトの強烈な閃光とマシンのエンジンのジェット噴射で吹き上げられた砂利で、

両眼を開けているのもつらい。

審問局の普通科歩兵部隊の二等兵が――ずいぶんと若い青年だが――マミヤの姿を見て怒鳴り声を上げてくる。

「貴様はなんだ？ ホテルの客か？ 子どもは中に入っているっ」  
ジェットの乱流がうるさい、耳に痛いぐらいに。  
自然に大声となる。

マミヤは無言で二つ折りの身分証明書を提示した。

二等兵の青年は瞬時に居丈高な態度を引っこめ、

「失礼しました曹長殿っ」

敬礼してくるので、マミヤも答礼した。

話すために顔を近づけると、上背のある二等兵は身をかがめてきてくれた。

「状況を教えてくださいっ」

「はっ、死傷者はゼロ、建物損壊は無し、  
容疑者の？ 魔女？ は第三級アーデルハイド暴走につき、呪法拘束中  
でありますっ」

マミヤは内心、ほっと安堵するとともに、顔に渋面をつくった。

？ 魔女？ は、魔導少女への差別用語だったからだ。

いや、自分こそ、異端審問局においては自分のほうこそ？ 異端？  
かも知れないな、

マミヤはふと、そう思った。

審問局員のあいだでは、差別用語はありふれたオフィスの会話でも  
平然と使われているのだ。

現にこの二等兵は、魔女、の単語を発音するとき、

迫害する者特有の不快なイントネーションを挟み込んでくる。

「お気をつけくださいっ、仲間の魔女が中隊長に猛抗議の真っ最中  
ですっ、

人権護民局のゴミ連中も駆けつけてきてますっ」

二等兵の言葉にマミヤの胸がざわついた。

真っ先にキャロルの顔がうかぶ。

そしてエリカのことだから、彼女もキャロルに付き添ってるにち  
がない。

最後に護民局。

この地域の統括責任者はあのカグラ護民官だ。

マミヤが皆の居場所を尋ねようとしたとき、エアマシンの胴体ハツチが下方に開いてきた。

「ふっざけんじゃねーよ、チキショウツ」

キャロルだ、彼女が怒鳴りながらハツチに姿を見せた。

ネグリジエタイプのパジャマの裾が風にあおられ、はためいている。

所々破けて泥だらけだった。

その両肩をカグラ護民官につかまれていた。

「なんだよ、離せよっアンタ護民官だろっ、ウチらの味方なんだろっ、

ちっとは役に立てよっ」

「まあまあ、お願いだから落ちついて、キャロル」

カグラはいかにも情けなさそうな愛想笑いをうかべていた。

そう、学校での？あの演技？の表情のほうをいまは見せていた。

「出ていけっ、俺の機体からとっとその魔女を連れ出せ、空気が穢れるっ」

中隊長だろう、野太い男の罵声がマシンの奥から聞こえてきた。

「とにかく、護民局といたしましては、異議申し立てをしておきますので」

カグラは平身低頭、ぺこぺこと頭を下げている。

キャロルはそれを見て、母国語らしき言葉でなにか悪態を叫んだ。カグラが、こちらの視線に気づいた。

マミヤと目が合う。カグラは一瞬真顔になり、また再び？頼りない護民官？の表情にもどった。

彼女がキャロルを抱きかかえるようにして、ハツチの階段を下りてくる。

そして、ふたりのうしろからゆっくり、美少女が現れた。

エリカ・ヴァンデル・メーアが。

肉体のラインを露わにしたキャミソールとフレアスカート。

どちらもやっぱり泥だらけだった。

スカートの裾を押さえつけながら、ハッチを下りてきた。

エリカとキャロル、美しい漆黒と緑の瞳が一斉にこちらをふりむいた。

「マミヤッ」

キャロルが叫んで、カグラの手をふりほどこうとする。

マミヤは躊躇した。

審問局員たちの眼前なのだ、キャロルから親しげな態度を見せられた、ただ、それだけ、それ自体がすでに危険であり、命取りだった。

審問局からすれば、魔女と通じてしまった？ 叛乱分子？ の姿、その証拠以外の何物でも無い。

そのとき、カグラが救ってくれた、瞬時にキャロルを後ろから羽交い締めにしたのだ。

「離せっこの役立たずっ」

なおも叫ぶキャロルを護民官はねじ伏せながら、マミヤの目の前を素知らぬ風にとおりすぎてゆく。

ふたりは取っ組み合いをしながら、ホテル・ユリスモールの正面玄関へと入っていった。

マミヤはただ、見送るしか術はなかった。

ふり返ると、目前にエリカが立っていた。マミヤの身分証明書を、ちらり、見るふりをしてから、少年の両眼を、凝視してくる。

長い髪の毛が、風にあてられその貌にかかる。

ミルク色の絹を思わせる肌に降りかかる幾筋かの髪の毛の束。

少年は、手を動かし、やさしく髪を整えてあげたい衝動をかりうじてこらえた。

「そんなにあの子のネグリジェ姿がお気に召したのかしら、？ 審問官さん？？」

「自分は、？ 異端審問獵騎兵です、お嬢さん？」

「今回の暴走を起こしたのは、うちのサバトに避難を始めた子よ、名前はチハヤ、貴方、エリート endpoint くれよね？ 助けてくださらない？」

「そのチハヤさんの処遇は？」

「警察病院再入院、二四時間の監視下付き」

エリカの言葉に、マミヤはうつむいた。

自分には、決定を覆す権限などなかったからだ。

「自分にはどうすることもできません」

「やだわ、頼りにならないエリートサンね」

くすつ、と微笑みをもらしてくる、じつとなにか、訴えかけてくる笑顔を見せる。

二等兵が少年と少女を交互に見ながら、

「曹長殿、彼女は単なるサバトの管理者の娘に過ぎません、お気を掛ける必要など——」

「下っ端二等兵は黙ってなさいよ」

「貴様、審問局隊員にむかって舐めたことをっ——」

二等兵の怒りの言葉を、マミヤは右手を挙げ、軽く制した。

「昨今はメディアの目もうるさいと聞いています、貴官の態度一つが中隊の名誉に直結します」

「しかし曹長」

「民間人の些細な非礼は、大目に見てやったほうが貴官の中隊によりいっそうの箔が付きます」

二等兵の青年は虚を突かれたようで、

慌てて計算をめぐらす大学生の顔つきになった。

「……まあ、そうですね、たしかに曹長がそうおっしゃるんなら……」

二等兵は気持ちの落しどころを見つけられたらしく、怒りを引っこめた。

そこへ彼の野戦服のリスタブに中隊本部からの連絡が入ってきた。  
『第一小隊、撤収作業をおこない、速やかに母機前へ集結せよっ』

二等兵の顔に緊張が走る。

マミヤに敬礼し駆け足で去っていった。

敷地内に散らばっていた第一小隊の兵士たちの動きが活発になる。そのあいだに、中隊長の座乗するエアマシンが垂直離陸を始めた。轟音、砂塵、何種類もの航空ライトの煌めきを地表に叩きつけながら、

機体は高空へと昇っていった。

敷地の別の場所に駐機していた第一小隊の軍用エアマシンも、カフェの外、

並木道に緊急着陸していた、中隊の他の機体も順次離陸していく。

「チハヤ、連れて行かれちゃった」

エリカは、ぽつり、つぶやいた。

「彼女の実家はもうなかったんだ」

エリカは空を見つめたまま、

「全焼しちゃったって、家族はとくに避難していたから無事だったけど」

中庭パティオのほうから、また離陸音を響かせて、人權護民局のマシンも飛翔していった。

マミヤがそれを見ながら、

「護民局は？ かばってくれたのか」

「だめね、ゴミンゴってあだ名だったかしら、あの女護民官、中隊長やら審問官やらにおどおど頭下げて、チハヤの拘束措置の緩和を頼み込んでいただけ」

マミヤは無力感に苛まれた。黙って、？演技を押し通してくれた？カグラを見送った。

空が明るくなってきている。

長い夜だった。

マミヤはユリスモールに、このサバトにきょう未明だけで都合三

度も訪れてしまった。

疲労だけがつのってゆく。

救いを求めるように、かたわらにいる少女の横顔をのぞき見た。  
表情を消して悲しみを押し殺しているエリカ。

マミヤは朝焼けのなか、彼女を、なおもある種、

威厳を失わずにいる少女のたたずまいを見つめていた。

疲れ果てた少年にとって、少女のこの横顔だけが救いだった。

この歳下の少女の、朝の陽の光の下、太陽をも圧倒する輝きの瞳  
が、

きつく結ばれた、ほんのり紅い唇が。

それは少年にとって、たしかに救いだった。



## 秘密会談

その重役室は広々としていた。

抑え気味の間接照明が床から天井をほのかに照らしている。

全体的に暗い部屋だった。

中央、巨大なデスクと権力の象徴のようなエグゼクティブチェアに男がふんぞり返っている。

エリカがつけたあだ名はフォアグラ野郎、本名はシャハト。

ヘルマン&ハイネマン社の重役である。

彼は、いま四皿目のフォアグラのトリュフソース添えを平らげるのに夢中だった。

部屋の壁際には三次元立体映像の広告が投影されている。

広告は高らかに謳っていた。

《ヘルマン&ハイネマン社は魔導少女の更生のため、

インター杯を後援しています。がんばれ、走れ、魔導の姫！

姫とともに我が社も走りつづけます》

『白々しい宣伝だな』

厳格そうな男の声が聞こえてきた。

シャハトのものではない。

声の主は、デスクの上の大型端末のモニタ上に映っている。たったいま、守秘回線でビデオ通話がつながってきたのだ。

白髪を丁寧に整えた、生粋の軍人タイプの容貌。

マミヤの上官、あの軍政異端審問局の？大佐？だった。

本名は一握りの軍政府高官しか知らない。

コードネームで？R大佐？か、または階級のまま大佐などと呼ばれている。

マミヤやソルベを指揮下におく第一異端審問猟騎兵連隊の連隊長

職に就いている男だ。

「いや、これはこれは手厳しいですな大佐」

シャハトは、へりくだる笑みを露骨にうかべ、一切れフォアグラを口に運んだ。

美味そうに咀嚼して飲み下す。

『？あと何回？だ？』

「先ほどエンジンアチームから連絡がきましたよ、

二回です、まちがいないですよ、

ゲシユライ・トラウム

大佐、姫があと二回希望の悲鳴を発動させた瞬間、

魔導爆燃機関は暴走、絶対危険領域に突入したまま大爆発します。

そうなるようにあの小娘のマシンに摩耗した部品を仕込んだのですから——」

もう一切れ、フォアグラを口に放りこんで、

「ん、美味い……つぎのレースこそ、

姫には？栄誉ある事故死？でもって彼女の常勝不敗神話に華を添えるようではありませんか？」

絶対危険領域。

魔導メーターのあの、赤く塗られたゾーン。

その最大値を振り切ると、彼女自身の魔導パワーとマシン本体燃料タンクの魔導石との？対消滅？が制御不能に陥ってしまう。

マギアパンツァー

魔導防御兵装のおかげで外からの防御は鉄壁だ、爆燃機関の大爆発でも彼女は無事だろう。

がしかし、パイロットとマシンとの対消滅が暴走したら話はちがう。

彼女の美しい肉体は、体中から血を噴きだして崩壊するのは避けられない。

モニタの中、大佐はつぎつぎとEペーパーの書類に決裁を与えながら、

『? プラチナチケット? の倍率はどうなっている?』

「ええと、お待ちください」

シャハトはデスクの引き出しの電子錠を解錠した。

中から紙幣一枚分程度のおおきさのEペーパーをとりだす。

それは金の卵だった。

その? プラチナチケット? にはこうインストールされた文字がうかんでいる。

《魔導少女迎撃競技杯 結果予想投票券 グレード?》

ターゲット…魔導の姫

エントリー中の迎撃者…五騎

サーキットコース (予定) スタート…千葉県木更津金田インターチェンジ

ゴール…東京都芝浦パーキングエリア

コース種別…公道

総距離…三四・三キロメートル》

このようにペーパー上段にこんどのインター杯の基本的な情報がデジタル表示されていた。

そして、下段。

《購入者の予想したレース結果…魔導の姫のマシンリタイア

現在の倍率…四〇三万一八二九倍》

《貴方の賭け金…一〇万円 現在世界中でこの予想をしているのは貴方一名です》

あの魔導の姫が、マシントラブルでリタイアなどという、  
途方もないレアな予想に賭ける者は世界をおいていまここに一名しかいない、

そうゆうわけだ。

もしもまかり間違つて、？ほんとうに姫がリタイアしたそのときには、

一〇万円×四〇三万倍で四千三十億円の払戻金を得ることになる。

「いやはや倍率は四〇三万一八二九倍ですぞ、万より下の倍率も含めれば――」

『そんな端金はどうでも良いのだ、

購入者は露見しないよう万全を期してもらいたい』

「心配ご無用です、スイスのプライヴエートバンクを使い、

ダミー会社を経由して偽装は完璧に手筈を整えてありますぞ」

シャハトはそういつて、したり顔の笑みをうかべる。

笑みながらフォアグラを、

ガチョウを無理矢理肥満させてからとりだす脂ぎった肝臓料理の最後のひと口に齧り付いた。

「太らせてから、処理する……勝ちつつけてきて、処理する……いや、

なんとも、フォアグラと魔導の姫、似た者同士ですなあ、その味わいも絶品ですぞ」

エリカが聞いたら怒りで瞬殺モノのセリフを吐いて、

シャハトはさらに高笑いした。

大佐は最後のペーパーに決裁を与えると、おもむろに葉巻をとりだした。

サイズは小ぶりで味の強い、高級品だった。

シガーカッターで吸い口を切りそろえ、ガスライターで火をつけると、

口中でゆっくり、極上の煙を味わっている様子だった。

『若干一二歳の魔女の娘が、七二連勝で得た巨万の富に囲まれ暮らしている、

病気でいつ暴走するかも知れぬ小娘ごときがな、

この私ですら、首都を荒らしておる暴徒どもの気持ちかわからんで

もない、

愚民が暴れるのも無理はない、酷く荒んだ時代だと、最近、とみに  
そう思うのだ』

「まったくもって、おっしゃるとおりですなあ」

『魔女どもはおとなしくホウキをへし折られて泣いておれば良いの  
だ、

無駄に勝ちすぎる身の程知らずな、ふざけた魔女は……』

大佐は静かに煙を吐きだした。

『身の程知らずの魔女には、この世からご退場願おうか』

あくまで、職務上の任務を遂行しているだけ、

そんな風な乾いた口調だった。

「大佐のご協力があつたればこそですなあ、

山分けした配当金で私はニューカレドニアに別荘を購入して余生を  
満喫する予定ですよ、

大佐はいかがなさるご予定で？」

『審問局の秘密資金に充てる、

なんとしても魔女を暗殺する秘密部隊の結成予算を得なければなら  
んのだ』

「ほっほっほ、ご立派なお志ですなあ」

大佐は、この俗物スノブを絵に書いたような、

フォアグラの塊のように肥満した重役に、なんの感情も見せない視  
線を送りつけた。

『すべては社会の治安維持のため、市民の安全のためだ』

大佐は、回線を切った。

エリカが服を脱ぎ捨てたとき、マミヤが味わった試練について

ホテル・ユリスモールの正方形の中庭<sup>パティオ</sup>から見上げる空は、三階建てのホテルの建物に切りとられて、やっぱり澄んだ青い正方形に見えた。

地上から、まるで天空にうかぶ水色の四角いプールを眺めている、そんな、不思議な錯覚を思いおこさせるものがあった。

中庭のおおきさは、ちょうど二五メートルプールがすっぽり収まるくらい、

それくらいの広さがある。

中庭の北側には、十人も入れば満杯になる程度のちっちゃいプールがあった。

空同様、澄み切った透明な水をたたえている。

初夏の昼下がりが、さわやかな曙光を浴びて、水面はキラキラと輝いていた。

溶けたクリスタルの結晶が乱反射しながら、真っ白に光り、うねっているみたいだった。

マミヤはプールサイドのビーチチェアに身をあずけていた。折りたたみ式のキャンバス地の感触が、疲労した体に心地よい。

「結局徹夜してしまったわね」

エリカが近づいてきた。ワゴンテーブルを押してきている。

アイスレモンティーのセット一式が載っていた。

彼女は泥汚れのついたキャミとフレアスカートのまんま、

着の身着のままだった。エリカは彼にアイスティーをさしだして、プールサイドに座りこんだ。

両のふくらはぎまで無色透明な水の中に入れる。

ばしゃばしゃ、水よりも透きとおった色の太ももを大胆に動かした。フレアスカートが揺れて、太ももの上のほうまで見えそうになり、

「見ないでくれる？」

気づけば、少女がこちらをふりむいていた。

慌てて、視線を外す。

アイステイーを飲む。

口の中がからからに乾いているのを、意識した。

会話の糸口を、話題を探した。午前中、さんざんふたりで話し合ったチハヤのことしか、やっぱり思いうかばなかった。

キャロル、そうだ、チハヤちゃんの見舞いにいったキャロルはどうしているだろうか？

マミヤは、タンブラーに注いでもらったアイステイーの琥珀色の残りをじっと見つめながら、

「……えっと、キャロルから連絡はあったのか？」

「さっきね、警察病院に着いたって知らせてきたわ、

チハヤとは面会謝絶で会えなかったって……いま、病院のロビーで寝ずにがんばってくれてる、

チハヤに会えるまで帰ってこないって息巻いてた、

それとタクシーのエアマシン、

いまは有事だからって、運賃五割増しで請求されたって怒ってた」

彼女らしい、マミヤが微笑んでつぶやくと、

エリカも、こくん、とうなずき返してくる。

いきなり、マシンガンの連射音が遠く、彼方からかすかに響いてきた。

エリカが不安げに、遠くを見透かす瞳をつくる。白い面太ももの動きがとまる。

「警察の武装機動隊がデモ隊の残党狩りをしているんだよ」

「鎮圧されたのかな？」

「審問局から連絡があった、国軍が神奈川方面に投入されたみたいだ」

「さすが獵騎兵さん、治安にお詳しいのね」

「初めてだな、獵騎兵と呼んでくれた」

エリカは———なんだか大人びた仕草がとっても彼女の雰囲気に合わせていたけれど———両肩をすくめて見せた、軽い感じで。

「審問官で、そんなにお嫌いなもの？」

「獵騎兵にしたって、嫌いだよ、こんな職業」

「だから、一四連敗してきたってわけ？ カド番になってクビになりたかったから？」

マミヤは答えるかわりに、アイスティーを一気に飲みほした。

「なのに、？魔導の姫？のヌードは見たくなっちゃったってわけね？」

マミヤは、琥珀色の甘い液体を盛大に嘔きだした。

咳きこみながら、

「なにを、急に」

エリカは両の瞳に蠱惑的な挑発の色をたたえてマミヤを、じっと、見据えてくる。

少女の双眸のその力にあらがうことはできず、視線をプールへと逃がしてしまった。

「あら？ だって、姫に勝つつもりじゃ無かったのかしら？」

「ほんとは、もうクビになってただの中学生にもどるつもりだったんだ」

「ムキにならなくってもいいのに」

「なってなどいないっ」

「魔導の姫が来日した途端、

その子のオールヌードが見たいから、隅々まで余すところなく、その目に焼きつきたいから、ホウキをへし折りたくなっちゃったから、

だから気が変わった、そうなのね？」

「そうゆういい方は……ないだろう？」



エリカは水辺に視線を投げた。

なぜかはわからない、妙にか細い声で、

「好きなの？ 魔導の姫さまのこと」

「……あこがれ、そうだ、あ、憧れていたっ、世界最強といわれている魔導少女に」

「そう？ それだけ」

「そうだよ」

「マミヤ、ねえ？ 自分の強さに、自信ある？」

マミヤは唇を舐めてから、

「無い、といえば、ウソになる程度には……」

「魔導の姫様に、勝てそう？」

「勝つ以外に道はないんだ、どうしても」

「そんなに彼女を脱がしたいのね？」

「ちがうっ、断じてちがうんだっ」

マミヤは、なんだか妙な汗をかき始めていた。

暑さのせいではない。

アイスティー、飲もうとした。

すでに手にもつタンブラーは空っぽだった。

やけっぱちになって、中の氷を噛み砕いた。

「ナホ先輩と、魔導の姫、どちらが好きなの？」

いわれて、こんどは氷の欠片で喉がむせてしまった。

激しく咳きこみながら、

「きみ、なんだかおかしいぞ、どうしたんだ、なにが言いたい？」

「別に」

「……その、服」

マミヤは声の裏返らないよう、慎重に発音しながら、

「服だけでも、もう、着替えたほうがいいよ、よごれてるし」

少女は、つんっ、と鼻を澄まして、

「ほんと、はっきりしないひとね」

いうやいなや、泥のついたキャミソールを脱ぎ捨てた。

フレアスカートも引きずりおろして脚から抜いてしまう。

マミヤは両手にタンブラーを捧げ持って——そう、まるでついに聖杯を見つけた敬虔な信者のように——一二歳の少女の肉体に目が釘付けになってしまっていた。

薄いピンク色のブラとショーツ。可愛らしいフリルの装飾で縁取りされている。

彼女がこちらを向いた。ショーツのフロント部分、淡いピンクの刺繍レースになっている。

半分、シースルーだった。大事なところの肌が見えそうで、見えなそうで——。

「なにをそんなに凝視しているの？ 魔導の姫様やナホセンパイがとっても可哀想」

「凝視などしてないっ」

少女はおかまいなしに、ランジェリーのまんま、プールに飛びこんだ。

美しい黒髪を濡らしながら、

光の乱反射で真っ白に輝く水面へと浮きあがってきた。

「きみは男子の前で平気でそうゆうことをするのか？」

怒り、そうだ、怒りのようななにかが、

急激にふつふつとわき起こってきてしまった。

少女は、頬に掛かる髪をほそい指で払いのけながら、

「貴方が汚いモノは脱げとゆうからよ、おかしなひと」

「着替えろ、っていったっ」

少女はくすつ、と笑顔をこぼして、プールサイドに両腕をついた。

「そんなにゆうなら着替えてくる」

上半身を水面から起こした。

そして見た、マミヤは見た、少女のショーツ、

両の太ももの付け根の中心が、フロントのシースルー部分が水で肌  
に、

ぴたり、張りついてしまっていて、

「あ、上がらなくていいからっ」

全力で視線を外した。

ほんとうに、渾身の理性を総動員して、両眼をきつくつぶった。  
失明しろといわんばかりに、まぶたを閉じた。

「？ どうしたの、猟騎兵さんたら……」

少女も、腰の下、自身の大切なところに瞳をむける。  
瞬時にプールの中にその身を沈める。

「見たでしょーっ」

声が一二歳の少女のそれに変貌していた。

恥ずかしさの塊、甘く切ない吐息とともに叫んでくる。

これが、本来のこの子の、少女の声、なんだろう。

「……見てない」

「ウソーツ、いま、間があったじゃないっ」

「き、きみの、せいだぞっ、そんな恰好でプール入るからだっ」

少女の返事は、ない。

マミヤは全身を熱い血潮の塊に、サマースーツとデニムを着てい  
るにもかかわらず、

心臓が体のあちこちからはみ出して空気に触れる痛みを味わってい  
た。

火照りは、激痛を伴う快楽に近かった。

恐る恐る、両眼を開けてプールを見た。

エリカは肩まで水に浸かって、じーっ、とマミヤを睨みつけてい  
る。

両の頬は痛々しいくらい、

可愛く真っ赤っかになってしまっていた。

「……ってくれる？」

マミヤは耳を澄まして、

「え？」

「お願い、だから、先に建物の中、入っててくれる？」

切なげに、少女は懇願してきた。

マミヤはもう、アウト、だった。

心臓が耳の隣で脈打ってるかのように、手にとるように鼓動が聞こえてくる。

体中の血液は、熱病に冒された患者みたいに煮えたぎって水分が全部あらかた蒸発したかのようにだった。

少年は、声を出すことすらできなくなってきた。

なんとか一、二度、うなずいてチェアのキャンバス地から身を起こした。

途端、また座りこんでしまう。

動けない、堅く、あんまりにも堅くなってしまっていたのだ。

デニムの前を突き破ろうとするぐらいに。

「どうしたの……」

少女がちっちゃく、泣くように問うてくる。

「ごめん」

少年もうつむいて、いっしょうけんめい、謝った。

いま、中庭に地獄の穴が開いていたら、

少年はよろこんで飛びこむつもりだった。

その自信がある。現にいま、体中を羞恥心の業火で灼かれているではないか。

地獄の炎に投げこまれたほうが、まだ少女に軽蔑されなくて済むとゆうものだ。

少女の、息を呑む声が聞こえた。

よりいっそう少年の頬が、朱に染まってゆく。

少女は、くすつ、と、それこそ——うれしそうに？——楽しげに笑い声を漏らしてきた。

「ごめん」

そうゆうしか、ほかにない。すべてのボキャブラリーが、脳内から蕩けて消えてしまっていたからだった。

「オトコの子って、ほんつとにサイテーね」

「ごめん」

やがて、ころころっ、とそれはほんとおかしそうに、十二歳の少女そのものって感じの笑い声がおこった。

少女は笑いをなんとか収めて、

「アタマ冷やしなさいよ」

そういつて、手で水をすくうとマミヤに思いっきりぶっかけてきた。

「冷たっ——」

そんなマミヤを見て、また少女はかるやかに、のびやかに笑い声を上げるのだった。

「……っんともうっ、待ってあげるわ、元の状態にもどるまで、ねっ」

「すまない」

「いやらしい、とってもエロくていやらしい獵騎兵さんだもの、大目に見てあげるわ」

すっかり、余裕をとりもどした調子でいつてくる。

そのくせ、少女のほうにしたって、あいかわらず全身肩までプールに浸かっていたけれど。

ついさっきまでと打ってかわって、その白い肌、

そのどんな部分だろうとマミヤにはもう二度と絶対見せてなんかやらないんだから

……健気に、懸命にそう告げてくるかのようだった。

## エリカの想い出〜ふたつで充分ですよ in ベルリン〜

「ねえまだあー？」

エリカが呆れ声とゆうか、愉悅の含み声とでもゆうのか、なんとも生き生きとしてうれしげに声を上げ訊ねてくるのが、マミヤはたまらなく悔しかった。

彼女はプールの中、うしろをむいてやっぱり肩まで水に浸かっている。

彼はプールサイドのビーチチェアに座りっぱなしだった。

七月の陽光が照りつけてくる。

それにもかかわらず流れる汗は、焦りをともなう脂汗だった。

少年の青い欲望は、履いてるデニムのせいでびっちり抑え込まれ行き場がどこにもない。

ないもんだから、猛り狂ったまんまだった。

暴発こそ、しなかったけれども。

マミヤは徹夜のナチュラル・ハイな気分も手伝って——疲労してるのにもかかわらず

——気持ちをどうにも手のつけられないレベルにまで昂揚させていた。

脚を何度も組み替えつつづけている。

いま、また組み替えたとき、エリカが、

「ほんと、サカリのついたエロワンコちゃんは始末に負えないわね」

「誰のせいだと思ってる？」

「さあ、誰かしらね？」

マミヤはどうとう、根負けした。

「エリカ、頼みがあるんだ」

途端、びくん、と少女の両肩が震えた。

「……なに？　なによ？　ヘンな頼みとかだったら承知しないんだから」

すこし語尾がおかしかった。

なんだか照れて、うわずっている感じがする。

まちがいない、彼女だっていっぱいいいんだ、マミヤは思った。

それが、なんだか無性にうれしかった。

「そんなんじゃないっ、だから……話題を、なんかいい感じの話系の話題を頼む」

「なに？ その無茶振り」

「なんでもいい……そうだ、きみの昔のこと、ちいさいころの想い出話とか、どうだ？」

彼女がゆっくり、こちらにむきなおる。

ふたりはようやく、その瞳同士で互いの存在をたしかめあった。

エリカはプールサイドで両手を組んで、かたちの良いちいさなあごを上に乗せた。

中庭の芝生と、素焼きのテラコッタの石畳とをぼんやり、眺めやっていた。

マミヤは辛抱強く、脚を組み替えながら待っていた。  
いい風が吹いていった。

水面が揺れて、少女のクリーム色の貌に眩しく光が乱舞する。

「……私のまだ幼いころ、ドイツでの話よ、

パパに立食パーティーに連れて行ってもらったの」

マミヤは額に流れる汗をぬぐいながら、

「いいもんだな、いかにもヨーロッパらしいとか」

「ええそうよ、私よろこんでパパについていったの。」

エアマシンでベルリンの空を飛んでね、街の中心街にてっきりいくもんだと思っていたら、

とんでもないところっちゃったの」

「とんでもない？」

「そう、繁華街のなかでも場末のほう、小汚いちいさな店、立食スタンドよ、パパったら平気で入っていくのよ」

怒ったような、つつけんどんな彼女の口調。その貌のほうはちがった。

言葉とは裏腹にたいせつな、とってもなつかしい記憶なんだと、そう表情が告げている。

「私まだ背が低くって、スタンドに置かれた料理も見えなかったの、ふて腐れちゃってそっぽ向いてた。

パパは残念そうに、私のこと見て寂しげに笑ってたっけ」

「ドイツ料理だとして、軽食スタンドだろ、なんの店だったんだ？」

「日本ソバよ、立ち食いソバ」

マミヤは瞬きをした。

あまりに予想外だったから。

「パパったらたどたどしいニッポン語でソバを注文してるの、ところが店の人がガンコオヤジってヤツ？」

パパとけんか腰で口論になっちゃってね」

「なぜだ、ソバの注文をしただけなんだろう」

「パパが頼んだのは、エビ天ソバよ、

トッピングに大エビ四つくださいって頼んでたのよ、

店の人、そんなに食べれないから、残飯出すのはだめだから二つで充分ですよ、って、

それでケンカ」

「昔気質の店主だね」

「そうね、いまでもあの店主の言葉、ニッポン語で怒鳴った言葉、憶えてるんだ……」

？ふたつで充分ですよっ？って何回もそうニッポン語で怒鳴ってるの、

残飯残すはニッポンの恥、ってね、口うるさい店主だったみたい、



それでもけっこう繁盛していたのよ、  
ニッポンびいきのドイツ人たちが常連でひっきりなしに出入りして  
たわ」

「それで、エビ天はどうなったんだ？」

「結局ふたつしか乗っけてくれなかったの、

ソバの上に。あとから聞いたんだけれど、

パパったら四つのエビ天を私と二個ずつ半分こするつもりだったの  
よね……で、パパね、

二本のうちのひとつをね、不器用に箸でなんとか挟んで、私に差し  
だしてくれたのよ、

エリカ、これがママの故郷のニッポンの味なんだ、  
って……そういつてね……」

ベルリン時代を懐かしむ、少女の貌。繊細な微笑みがそこにはあ  
った。

「美味しかったか？」

エリカは首をふった。

一転、表情を消して、首を横にふった。

「食べなかったの、意地張って、立食パーティーって騙して連れて  
こられたから、

私、馬鹿な意地、張っていたのね」

後悔している話しぶりだった。

彼女の口調からは、たしかに後悔の記憶が読みとれた。

「ほんと汚い店だったの、なのにとっても美味しそうな香りがする  
の、

ダシの香り、油揚げるパチパチってゆう音、

不思議なお店だったな、エビ天、コガネ色にキラキラしていて――」  
エリカは瞳を閉じた。

「美味しそうだったの、とってもね、美味しそうだったのよ、

やせ我慢して食べなかったの、パパがみんな食べちゃったわ、サクサクッ、ってすごい良い音させながら、ソバをヘタツピにすすりながら、

熱い熱いっていいながら……美味しそうだったの、とても……」

マミヤはじつと、耳をかたむけていた。

「そのあと、お父さんといく機会があったのか？」

エリカは、ペろっ、と舌を出してきた。

「それがね、家庭の事情ってヤツ？　？いろいろとあった？のよね、よくある家庭の不和ってゆうか、ゴタゴタがあってそれっきりパパといく機会はないまんまよ、いまも、そのまんま……」

「……」

「あ、詮索はしないでよね」

マミヤはうなずいた。エリカの家庭の事情。

深く立ち入るのは憚られる気がした。

ふたりの手首のリスタブが震動した。

バイブレーター機能だ。

メールの受信だった。

「いまごろ学校から連絡きたのね」

「ああ、有事につき無期限の休校か……やむを得ないな」

「これで安心して？魔導の姫？に？挑める？わよね？」

エリカはいたずらっ子のように、ちろっ、とまた舌を出してきた。

マミヤは真顔で、

「ああ、きみのゆうとおり、姫を雑音抜きで？倒せる？」

彼の表情を見て、彼の声音を聞いた少女の貌から一瞬で笑顔は消えた。

かき消えていった。

ふたりは真剣な眼差しで、互いを見つめあっていた。

しばらくのあいだ、微動だにせず、少年と少女は見つめあっていた。

プールの清らかな水だけが、そよ風に揺られ、夏の昼下がりの陽光をはね返していた。

## アルバトロスM―VK36タイプ110―哀しみのエリカ

服を着替えたエリカ・ヴァンデル・メーアが、ホテルの屋上でエアマシntaxシーに乗りこむマミヤを見送ったとき、

うまくちゃんと笑顔で見送れたかどうか、自信はなかった。

なぜなら彼は倒すと、エリカを倒す、

よりにもよってそう断言してきたのだから。

いっつも彼に見せてきた冷笑的な微笑を見せる余裕など、とうに喪っていた。

独りのとき思わず妄想でうかべてしまう十二歳の少女のあどけない笑顔を見せたわけでもなかった、当然ではあったけれど。

この笑顔は、マミヤに見せるためにだけ、

それだけのためにいままでとっておいてきたものだった。

そう、とっておきの笑顔。大好きなマミヤにだけ、

あのひとにだけ見せることのできる、飾り気なし、

心から、エリカは心から思う、これがほんとの私の素顔、素の私なんだと――。

私たち魔導少女のために、

プライドを捨て十四戦敗北を重ねつづけてくれた、

唯一の男の子。

強い、貴方は強い、

わかる、私にはそれがわかる。天才は天才を知るものなのだ。

魔導少女の動体視力をもってすれば、

どれほど貴方が苦心して呪法弾をわざと外してきてくれたのか。

ここぞというタイミングを数瞬ずらしてミサイル弾を撃ってきたのか。

私たち魔導少女の投射した呪導爆雷をкаろうじて回避する演技。

無能者を装う演技。

ほんとに凄い、エリカは思った。神業としかいいようがないくらいに。

エリカはそんな気持ちを、抑え込まないとあふれ出すあのひとへの想いを、  
かろうじて心に押し込めていた。

ちょうど魔導爆燃機関が、少女から吸いとった魔導エネルギーと魔導石の対消滅による大爆発をそのシリンダー内に封じ込めるように。

圧縮と燃焼のサイクルをくりかえすのとおんなじように。  
けれど、排気は？

この想い、吐きだす相手は？

マミヤ、貴方はまだ、私のものじゃない。

貴方は事もあるうにこの私を倒すと言い切った。

世界一難敵ひしめく欧州リーグの、その覇者たる？魔導の姫？に本気で勝つ気でいるじゃない？

怒りだ、これは本物の怒りだ、この私を舐め切っているのだから。

この魔導の姫を、本気で倒すつもりの方。

真の実力者であるからこそそう思ってしまう貴方が、この上なく愛おしい。頼もしい。

男の子として、私の身も、心も、捧げる相手は世界中で貴方をおいて他にはいない。

けれど――。

異端審問獵騎兵は、獵犬のパイロットは、

決して魔導少女と交際してはならない。

決して両者のあいだには、異性交遊許可証は下りてはくれない。  
下ろす国家はこの地球上のどこにも存在はしない。

「だから私が勝つわ、マミヤ、貴方がそれほどまでに己の職業を忌み嫌っているのなら、だいじょうぶよ、私が、せめて私の手で貴方の苦役でしかないキャリアにピリオドを打ってあげる」

ホテルの地階へとつづく秘密エレベータの箱の中、彼女は独り決意をこめてささやいた。

黒い真珠のように光を放つ瞳を閉じ、想う。

貴方は強い、たしかに。

でも、私の敵では無いの、

それがわからないの？

なぜわからないの？

私の愛する貴方——。

定員八名の箱から解放され、地下五階に下りたった。

まぶたを開き、我に返る。想いをふりきる。

ヘルマン&ハインマン社の武装警備員たちが——二十四時間常駐する鬱陶しいボンクラ連中が——エレベータホール前で一斉に敬礼してくる。

魔導の姫に、エリカ・ヴァンデル・メーアにむかって。

エリカはいつものように、無視寸前のおざなりな動作でそれに応えた。

シャワールームに直行する。

ワンピースを乱暴に脱ぎ、糸まとわぬ裸身となる。

全身に温水を浴びる。滅菌洗浄され、更衣室へと足を運ぶ。

ここは、ニッポンでつくられた姫の聖域だ。

金属質な灰白色の部屋。右にずらり、  
マギアバンツァー魔導防御兵装が何着も収納されていた。

正面に等身大の姿見。巨大なミラーに美しい乳白色のフルヌードを惜しげもなく晒け出す。

まだ幼いながらも、しつとりと息づくふたつの胸を、ほそく締まった腰を、カラダの中心の未成熟なアンダーヘアを、傷ひとつない、完璧な自分の肉体を凝視する。

「見て？ マミヤ私を見て？ このカラダはあなたのものなのよ？ あなただけのもの……」

長い、とても長いため息を吐きだす。

怒りのあまり、奥歯を噛みしめるのがとまらない。

愛するひとからの侮辱は、断じて容認できなかった。哀しかった。なぜなら――。

エリカは思う、私がこんなに愛しているのに、

貴方は？魔導の姫？に夢中なのだから、と。

パンツァーを裸身の上に装着して更衣室を出る。

カラーはローズレッド。長い黒髪とミルク色の貌にとってもよく映えるカラーだった。

姫のほそい、しなやかな肉体にフィットして、全身のボディラインをくっきりと浮きあがらせている。

地下五階の格納庫。姫専用の格納庫だ。

上の地階は、キャロルやチハヤたち避難者の格納庫や更衣室にあてがわれている。

学校の体育館ほどの広大なスペース。

高い天井。

無影灯がぬくもりの欠片もない照明を放っている。

いくつも連なる大型工作機械の群れ。

ここはたった一騎のためだけにある精密工場だ。

技官、魔導工学エンジニア、メカニックマンらが一斉にうやうや

しい挨拶をしてきた。

その有象無象すべてを無視して、

愛騎の魔導二輪装甲車輛へと最短距離で歩いてゆく。

パンツァーとおなじカラーリング、

深みのある格調高い緋色の山猫。

ヴァイルトカッツェ

フロントカウル

前面装甲板はシャープな流線型。

機体後方へゆくに連れ、少女の肉体のように艶やかな丸みを帯び  
波打つフォルムとなっている。

アルバトロスM―VK三十六タイプ一〇。

一〇〇%ドイツ連邦共和国純正部品で製造された赤い山猫だ。

互角の性能を誇るあのマミヤたちのフォッカーM？とならぶ傑作  
騎だった。

「姫、メンテナンスはすでに？完璧に？済ませております」

H&H社の主任技官が――シャハト直属の部下――が丁重な言葉  
遣いで告げてくる。

魔導の姫は、黙って唯、うなずいた。

姫の双眸が妖しく輝き出す。

あの魔導の光を、蒼白色の光を放ち始めていた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0037y/>

---

駆けろ、姫に賭けろ！

2011年11月10日13時02分発行